會報

第 7 号

滋賀県老人大学校同窓會

会報第七号

目次

一、あいさつ　会長　中川　長三　……1
一、発刊に寄せて　学校長　稲葉　稔　……3
一、あいさつ　県老人クラブ連合会　局長　藤野利之助　……4
一、支部活動報告
○大津支部　高野　惣平　……6
○甲賀支部　丸市　喜好　……7
○湖南支部　林　秀一　……8
○近江八幡支部　中嶋庄右衛門　……11
○湖東支部　塚本源太郎　……13
○彦根・愛犬支部　野中　正　……15
○高島支部　岸田　七次　……16
○湖北支部　宮崎　程彦　……17
一、会員現況
○まねごとでもしたい
（一園）　下司　清　……19
○近況報告
（三文）　西尾　公子　……20
○老後の暮し
（三園）　北川喜太郎　……21
○陶四会（四陶）　林　信夫　……22
○三太夫の金時計
（五文）　……22
○あるく（六陶）　仙頭　利子　……23
○善隣友好
（八陶）　田辺　博　……24
○老人大学の思い出
（九生）　間宮　太か　……26
○夢
（一福）　丸市　喜好　……27
○思いつくまゝに
（一園）　熊谷清一郎　……27
○生きがい
（一）　石川まつえ　……27
○人生八十年
（三陶）　福井　信一　……28
○随筆（三）　木村　主税　……28
○慕情（四陶）　島田寅治郎　……29
○かけがえのない一度きりの人生を
（四園）　林　長夫　……29
○最近思うこと
（四生）　澤　せき　……30
○老大への誘い
（五陶）　金山　良吉　……30

○思うまま
（五陶）室谷　光次……30
○文芸学科感
（五文）山脇　義一……31
○磯尾老人クラブ
（五園）芥川　徹……31
○夢を追う
（五文）大西　つじ……31
○自由なクラブ
（八陶）千代倉太郎……32
○爽やかな心と体
（六陶）石川　季夫……32
○思うまま
（五園）臼井　良江……32
○動　き（六陶）田中　一夫……33
○随　筆（七園）中沼　宗寿……33
○私の提言
（五文）石田　義雄……34
○町内研修漫歩
（四文）後藤猪三郎……34
○所　感（三陶）嶋　鉄男……35
○ハリバンサバのこと
（五文）川嶋　勇……35
○私の心構え
（五園）大西　憲司……36
○所　感（六陶）西田　三郎……36
○銅鐸と人生
（七園）石井也尺寿……37
○生きがいを求めて
（七生）林　愛子……38
○私の思うこと
（八文）田辺　平吾……38
○随　想（九文）寺村藤太郎……39
○風車と花菖蒲の町に住みて
（四文）森　三郎……39
○ひと節こえて
（九園）木村　三郎……40
○高齢者の生きがいに思う
（八文）安倍　勉……42
○ふるさと探訪
（二生）宇野よしゑ……44
○近江人物誌を編纂して
（四園）畑中保治郎……45
○平成新年所感
（五園）山西　康雄……46

○帰る旅（六文）　野沢　政次　……47
○年の火（四文）　大道喜一郎　……47
○私の活動近況
（八文）　中川宗多郎　……48
○エンヤコラ会
（八園）　竹村　善二　……48
○植物に学ぶ
（八園）　溝井　常夫　……49
○老人大学
（九園）　伴　清一　……49
○滋老大同窓会研修会に参加して
（二文）　山本喜一郎　……50
○冠句の面白さ
（三園）　西山弥一郎　……51
○親睦会（三園）　辻　幸夫　……52
○座右の銘
（三文）　北川弥一郎　……52
○病後の生活について
（二文）　近藤辰次郎　……53
○追　憶（七文）　寺村　ヨシ　……53
○私の近況
（一園）　高木　三雄　……54
○湖友会のこと
（三文）　加藤　さだ　……55
○草津謡曲研究会について
（三文）　西尾　公子　……56
○湖友同窓会
（三文）　坂田定五郎　……57
一、同窓会研修会を終えて（昭和六十三年度）
研修部長　中嶋庄右衛門　……58
一、老人大学校の現況　……60
一、老大開校十周年記念を終えて　……61
一、会　則　……62
一、昭和六十三年度同窓会役員名簿　……63
一、編集後記　……64

ごあいさつ

会長　中川長三

春尚浅き平成元年睦月半ばの今日、国民斎しく天地に祈った誠も容れられず、太行天皇の崩御。まことに哀痛の極みであります。諒闇のさ中ながら、親愛なる同窓諸兄姉と第七号会誌上に相見えることはせめてもの喜びであり、久濶を抒しつつ互に老のしあわせを感じるところであります。

憶えば昭和は余りにも激動のことのみ多く筆舌につくし難い苦痛悲愁は今も忘れられずよく耐えて今日あるものと我ながら信じられぬ思いです。しかしながらわれわれは、平成元年の年頭に生かされています。恩讐をのりこえ心身をひきしめてたつきに励むべきであります。

さてなつかしい母校、滋賀県老人大学校も創立十周年の秋を迎え新設の米原校に九十余名、大津校に百二十名の新入学生を収容し、現在籍三百余名の多きに達し、講師陣営の強化向上と諸施設運営の妙を発揮し学習効果の進展著しく校運隆昌の春を迎えましたこと寔にご同慶の至りであります。

同窓会も七百五十余名の会員が県下八支部の根強い拠点を構築し各支部長を中核に地域社会参加のよきリーダーとして活躍し高い評価をうけつつあります。このことは県老大設立目的の大いなる一里塚であります。どうかさらにさらに団結を強化し研鑽これ力めて大成を期したいと念じます。

本部も各部とも旺盛な活動を展開しています。会報も林部長はじめ部員各位のご励精により号を重ねて第七号。他に新聞も発行しています。研修部も第二回の研修の旅を沖の島できわめて有意義に実施しみんなからよろこばれましたこと全く中島部長のお骨折りです。

総務部も事業計画・予算編成に腐心して万全を期しつつあります。

昨年十一月に奈良県老人大学校の同窓会から三十余名が来校され盛大な交歓研修会を持ちましたのもこれらの活動が評価されたからでしょうか、嬉しいことでした。思えばもう絶対に若くはなれません老人です人生の終焉が迫って来ていることをどうすることもできませんが淋しがらず悲しむことなく盟友相携えて生の充実につとめたいものです。

古来指標に〃真〃〃善〃〃美〃〃聖〃が挙げられています。浅学非才の私には勿論、世界、人生の究極の根本原理を追求するという哲学的な解釈はできませんし常識的な意味すら充分でありませんが、

先づ〃真〃とは認識上の真、即ち真理これを追求する所謂学問の道。いろいろの分野で夫れ夫れの領域に於ける研究が人類社会にプラスかマイナスかを問わず進みつゝあります。

次に〃善〃とは倫理上の善。善悪の善で人倫のみち実際道徳の規範となる原理。人類社会で守られなければならぬ人の人たる道であります。今日世相の道義退廃は余りにも強烈で人の世とも思えぬ犯罪の多いことが歎かれています。

つづいて〃美〃とは美醜の美で審美上の美で芸術の道。美は古今東西を問わず斎しく人類永遠の憧れであります。往古よりの芸術作品（絵画書彫刻音楽文学作品等々）有形無形の文化遺産もが大切にされる今日であります。

さておわりの〃聖〃とは智徳が最もすぐれあまねく事理に通じ真善美を超越した聖（ひじり）の道。信仰の道を指します。即ち戦地から帰った英霊の箱の中味が土であろうと石であろうと信ずれば亡き夫の父の兄の遺骨となる世界を云うのでありましょう。

思えば老骨の私には真も善も美もすでに遠ざかりつつあります。いわんや聖の世界をやの日々でありますがせめて妙好人の一片（かけら）でもそして煩悩に束縛されて迷っている凡夫、直入（ちきにゅう）の信仰に辿りつかせていただけないかと、朝な夕なを祈るのみであります。

みなさんのご多幸と、母校並びに本会の弥栄を祈ります。

第七号会報の発刊に寄せて

滋賀県老人大学校長　稲葉　稔

滋賀県老人大学校同窓会会報第七号が発刊されますことを、心よりお喜び申し上げます。

昭和五十五年に老人大学校卒業生のみなさんが集い、同窓会が創立されてから、はや八年を迎えようとしています。

その間、同窓生のみなさん方におかれましては、老人大学校の精神を踏まえ、地域社会におけるリーダーとして日々御活躍いただいておりますことに、心から敬意を表したいと思います。

さて、本格的な高齢社会を迎えようとする我が国において、老人福祉はすべての人が考え、対処していかなくてはならない重要な問題となってきています。人口の高齢化は家族の在り方をはじめ、地域社会や各職域など社会システム全般にわたりさまざまな問題を提起しております。真に豊かな生きがいのある長寿社会を築くためには、こうした課題を県民すべてに共通のものとしてとらえ、世代を超えて取り組まなければならないと思いますし、県でも、その観点に立ち、レイカディア十か年プランを推進しているところです。

このような状況の中では、高齢者自身もその持てるエネルギーを社会に還元し、新しい時代に即応した高齢者像や生活設計あるいは生きがいを創造し、自ら積極的な生き方をすべきであることはいうまでもありません。

老人大学校は昭和五十三年度に開校し、去る三月十一日開校十周年記念式典を挙行いたしました。同窓生の代表の方も参列され、意義深い式典になりましたことはこの上もない喜びであります。これを契期に今後共大学校の建学の精神を思い出し、更に学習を深められ、自己をみがいて、ますます元気で御活躍されるとともに、同窓会が相互の交流を深め、互いの研鑽の場として、いよいよ発展されますことを衷心より祈念いたしまして、ごあいさつといたします。

平成元年三月三十一日

ご挨拶

（財）滋賀県老人クラブ連合会
事務局長　藤野　利之助

滋賀県老人大学校同窓生のみなさん方におかれましては、地域社会におけるリーダーとして、日々御活躍いただいておりますことに対し心から敬意を表するものであります。

さて、わが国の経済社会は高令化、技術革新、情報化、国際化などの潮流変化に伴って大きな変貌を遂げつゝあります。

産業構造の高付加価値化、知識集約化が一層進展するとともに、私達の価値観は多様化、個性化しており経済社会全体が「ハード」から「ソフト」へ、「モノ」から「サービス」へと変りつゝあります。

また、平均寿命の延長や長寿化に伴い、私達のライフスタイルは、「人生50年型」から「人生80年型」へと移行し、単身化の進展や、女性の社会進出などにより、家庭の構造や機能もだんだんと変化してきております。

私達の意識も生活水準の向上や、自由時間の増加により生活の質や、精神的な豊かさへの志向も高まってきました。

このようなことから、本県におきましては健康老人の生きがい対策事業の一つとして、滋賀県老人大学校が昭和53年10月に開設され、以来10周年を迎えました。

私も当時は、県庁老人福祉課で開校準備の一翼を担い開校地、教科、講師および募集方法など、よりよいものにと検討を重ねたことを今、大変なつかしく思っています。本年、米原町に県立文化産業交流会館が竣工し、米原校が開設されたことは校運のいよいよの隆盛と誠に喜ばしく存ずる次第であります。

老人大学校開設の趣旨は、高令者の学習機会の提供、社会参加の促進と地域社会におけるリーダーの養成が目的であるので、卒業生のみなさん、老人大学校で学ばれた数多くの知識、技能をそれぞれ単位老人クラブで大いに発揮していただき、新らしい時代に即応した高令者像や生きがいを会員の方々に教えていただきたいと思います。

また、長寿社会の進展に伴ない長くなる老後を充実した豊かなものにしたいと考える高令者は多くなっておりますが平均寿命の伸びと共に、ねたきり老人、痴呆性老人やひとり暮し老人も増え、今日では在宅福祉が大きな社会問題になってきております。

どうかみなさんの今迄の仲間をそれぞれの地域で出来る限り手をほどこし、問題の解決に努力していただくことを地域のリーダーであるみなさん方にお願いを致します。

最後になりましたが同窓会のみなさん、相互の交流を深め互いに研鑽していただき、より発展されますことを心から祈念いたしまして私のごあいさつといたします。

大津支部活動状況

副支部長　高　野　惣　平

当大津支部は現在会員数一四一名となりました。大津市の南地に長い地形からして、北部から南部地域までを八ブロックに分け、支部組織の充実と会員相互の連絡強化を図りつゝ、同窓会活動に努めつゝあります。

六十三年四月二十八日、大津市老人福祉センターにおいて、当支部第四回定期総会を開催。来賓として県同窓会長中川長三氏、老人大学校事務局長坂啓二氏を迎え、総会は前年度会務報告に始まり同会計報告、翌六十三年度事業計画（案）並に同予算（案）について審議の結果、原案どおり満場一致をもって可決承認されました。引続いて懇親会に移り各期別グループに相寄り賑やかに終始和やかに、しかも盛況裡に終了しました。当日の出席者七十一名

六十二年五月二十三日、支部ゲートボール大会（大津市中之庄児童公園グラウンドにて）開催。出席者二十五名で抽せんにより五人一チームとし五チームを編成して、二コートを使用し試合はリーグ戦方法で行なった。当日は前々日よりの降雨で実施が中止かの判断に執行部は随分と迷ったが決行した。抽せんによって作ったチーム故初めてのメンバーであったが、さすが老大同窓生であって意気統合終日楽しく、珍プレーもあったが笑いの内に全試合を行なうことができ、優勝チームから四位までに賞品を授与し大会を終った。大会終了後参加者全員で近くの杉浦会館にて懇親会を開催した。

六十三年六月二十二日、県老人大学校同窓会が石部町立児童会館において開催され、当支部から二十四名が出席した。定期総会は中村副会長の司会にて、中川会長の式辞及び名議長振りは感服の他なく、提案された全議案は原案どおり可決承認され懇親会に移り盛大裡に終了後甲賀支部の配慮により、天台宗十五寺参拝と国宝（仏像）の拝観をすることができた。

六十三年十一月十七日、天台真盛宗総本山西教寺参拝及び同老人ホーム真盛園の慰問を秋の行事として実施した。真盛園では、他用のあるのにも拘らず我々のために八耳園長自から真盛園設立の経過と園内施設全般についての詳細な説明を聞き、園長の案内で真盛園の近代的な設備の見学と慰問を終了した。

西教寺では研修道場において中島敬城僧正より「西教寺の由来と仏教について」の説教を聞いた。西教寺は聖徳太子の開創で皇室にゆかりが深い。慈慧大師良源恵心僧都源信らによって復興され、念仏の道場になった。元亀元年織田信長によって焼失、その後の復興には明智光秀の力が大きかったとされ、現在に至っている。昼食は当山特製の精進料理で会食した。引続いて懇談会のうえ本堂に参拝本尊は重要文化財の阿弥陀如来像で又客殿は伏見桃山城より移転したと聞いた。当日参加者四十五

名。

支部役員会について

支部の行事及び事業計画を実施するについては、理事会及び理事、幹事会とに区別し、前記八ブロックより選出の理事及び幹事をもって構成している。役員会は必ず事前に開催し立案、実施までの準備全般に亘り協議し事業の遂行に努めている。

甲賀支部のあらまし

支部長　丸　市　喜　好

同窓会の主たる目的は親睦で、老人大学の学科構成によって卒業後は学科ごとに親睦のつどいをもってその目的は果しているが、支部全体となるとなかなかむつかしいことです。

支部の構成

支　部　長　丸市　喜好　　石部一期福
副支部長　石川まつ江　　水口一期陶
〃　宿谷　光次　　甲南五期陶
理　事　小嶋　小石　　水口二期陶
〃　林　長夫　　甲南四期園
〃　金山　良吉　　土山五期陶
〃　川口　満子　　信楽七期生
理　事　黄瀬　由子　　信楽五期生
〃　沢　やつ　　信楽六期文
〃　井上　佐助　　甲西六期文
会計庶務　島田寅治郎　　水口四期陶
会計監査　小嶋　小石
〃　林　長夫
理　事　山脇　義一　　甲南五期陶

（地区別）

信楽	12名
土山	1名
甲賀	7名
甲南	12名
水口	11名
甲西	21名
石部	8名
計	72名

（期　別）

1期生	5名
2期生	6名
3期生	5名
4期生	6名
5期生	12名
6期生	15名
7期生	11名
8期生	6名
9期生	5名
計	72名

（学科別）

園芸	25名
陶芸	21名
文芸	13名
生活	12名
福祉	1名
計	72名

支部結成してから四年、振りかえってみてもこれという業績もなく多くの役員にささえられてきたに過ぎない有様、ただ昨年六月二十二日に滋賀県老人大学校同窓会の総会の当番支部として会場さがしに振り回わされて、やっと石部町西寺児童館にて開催できました。

出席の皆さまには送迎のマイクロバスの手違いのありましたことをお詫びいたします。

当日は役員および地元会員の努力に感謝しています。

いまは八十歳時代つぎは百歳時代、そこまできているのではないか、と思われます。経済大国になっても貧しい国の当時のままの意識にしばられていたのでは、豊かさを実感できる国民生活はなかなかできないのです。

人生は一度だけでやりなおしは出来ない。自分を大切に元気な日常を、老齢になっても老人になるな、の心がけで何が何でも百歳まで働いていたいと頑張ることです。

湖南支部報告

支部長　林　秀一

老人大学校二ケ年の在学期間には、学生の総てが歳老いて曽てない充実感を等しく実感しましたが、同窓会は果してその延長線上にあって、地域社会に喜んで奉仕し積極的に全会員が活動できているであろうか。若し不充分だとすれば、それは支部運営に問題があると言わざるを得ません。勿論、同窓生の中には、地域老人クラブの活動の主軸となり、青年の若さで活躍している方々も数多くおられますが全会員だとは言えません。

又、老人大学校の入学動機は調査していませんので、よく分かりませんが、少なくとも共通して言えることは、人生に対して積極的な性格の持主であることと、それからもう一つは、一国一城の主として活躍され、自分の歴史を作り完成された方々であること、即ち、理解力が抜群であると言うことです。こんなすばらしい会員ですから支部運営がうまく行けば、光り輝く同窓会が期待できます。

湖南支部では、このことが漸く支部役員の中で分かり、具体的にどうするかを討議することが出来るまでになりました。そして基本的には、全会員が同窓会をよく知り、各自の人生にとって、今何をすべきかを十分理解して貰っていることが大切であるといえます。昨年の会報では、魅力ある同窓会にしょう、と盛に書きましたが、魅力ある同窓会というのは、会長や支部長、もしくは役員が、考え出すものではなく、全会員が、同窓会行事に参加することによって魅力が滲み出て来るものであると分って来ました。

それが為に、同窓会をよく知ってもらうため、①支部総会に

参加をお願いし全会員一人一人に総会通知状を郵送する。②総会が終って出席出来なかった会員には総会での決定事項等を支部役員が家庭を訪問して手渡す。③支部主催の、同窓会研修会（小旅行又は見学）は、早い時期に全会員に通知し、参加できる態勢作りに取り組む。④老大公開講座も全会員に通知する。⑤支部新聞を発行したいが、そこまでは手が届いていません。

この様にして可能な限り同窓会員に知って貰おうとしていても、会員にとっては、もっと、もっと知りたい何故知らせないのか、と、通知を待ちかねて、おいでだと、思っています。益々通知することを深く考えて行かねばと思っています。

次は、会員一人一人の参加を多くする為に、①昭和六十三年度総会の出席者数は、委任状提出者を含めて、九十四名中七十九名でした。出席率は大変高い数値に喜んでいます。②支部研修会（甲賀郡かもしか荘へ晩秋の一日バス旅行）には、参加者一〇九名中三十八名で、三割参加に留まりました。③老大の公開講座については、参加調査が出来ていません。④本部行事（本部総会、本部研修会）の参加は、規模や会場の都合で、支部割当てとなり、全会員参加が不可能となっていることについて、お詫びいたします。

本部の総会等に出席を希望される方々は、「曽っての同級生に会いたい。」との想いからですが、実際は会いたい同級生も出席数制限のため、来ていない場合が普通です。それでも是非会いたいと思っている場合には、同級会か同期会に呼びかけて開催されることを、お奨めします。同級会はそれぞれ頻繁に開催しておられるグループがある様に聞いていますし、昨年十一月。五期文芸科が永源寺でクラス会を開いた時、同日同会場で三期生活科もクラス会でした。賑やかに交換しました。⑤縦割りグループの研究会や縦割りグループの作品展示会を実施されたことはありませんか。これは老人大学校での同学科の人で一期生から九期生までの方々が地域で寄り合って研究会・作品展示会をやっている場合に申請があれば補助金を支部費から出そうというものです。一口五千円位は補助出来ると思いますが、現在までにはどなたからも申請が出ていません。みなさん積極的に考えて見て下さい。

最後になりましたが湖南支部報告として湖南支部役員名簿を掲載いたします。

滋賀県老人大学校同窓会湖南支部役員名簿
（昭和63年度～昭和64年度）

役職名	(期)	氏名	〒	住所	電話
支部長	(5)	林　秀一	525	草津市西渋川一丁目16－64	0775-62-5148
副支部長	(5)	川嶋　勇	520-23	野洲郡野洲町久野部312	〃 87-1448
理事	(3)	飯田　正巳	525	草津市矢倉一丁目6－15	〃 63-4106
〃	(3)	中川　保二	520-24	野洲郡中主町八夫1491	〃 89-2565
〃	(4)	後藤猪三郎	520-30	栗太郡栗東町蜂屋90	〃 52-0362
〃	(4)	稲村　直子	525	草津市矢橋町23－36	〃 64-2891
〃	(5)	大西　憲司	524	守山市金森町683－4	〃 83-1425
〃	(5)	石田　義雄	524	守山市石田町222	〃 85-1821
〃	(6)	森元喜久蔵	525	草津市東草津三丁目4－6	〃 62-1737
〃	(6)	西田　三郎	520-23	野洲町南桜近江富士1460－96	〃 88-2677
〃	(6)	野々口たつ	520-05	滋賀郡志賀町南比良	〃 92-1103
〃	(7)	林　愛子	520-30	栗太郡栗東町蜂屋75	〃 52-2835
〃	(7)	石井也尺寿	520-23	野洲郡野洲町小篠原1128－3	〃 87-0897
〃	(8)	伊藤　治初	525	草津市野村町454－3	〃 63-1041
監事	(3)	嶋　鉄男	525	草津市野村町454－1	〃 62-0385
〃	(3)	沢村銀一郎	620-06	志賀郡志賀町南小松	〃 96-0869
会計	(8)	伊藤　治初	525	草津市野村町454－3	〃 63-1041
顧問	(3)	伊藤　博祐	525	草津市野村町831－19	〃 64-6881

地域別理事

草津	（4名）	飯田　正巳	稲村　直子	森元喜久蔵	伊藤　治初
守山	（2名）	大西　憲司	石田　義雄		
栗太	（2名）	後藤猪三郎	林　愛子		
野洲	（3名）	中川　保二	西田　三郎	石井也尺寿	
滋賀	（1名）	野々口たつ			

本部派遣役員

本部理事（2名）　林　秀一　後藤猪三郎

湖南支部の現在の老人大学校同窓会員は次の通り百八名です。

（平成元年一月末日現在）

草津地域　四十一名
守山地域　十九名
滋賀地域　七名
栗太地域　十二名
野洲地域　三十名
合　計　百九名

尚昭和六十三年度の物故者は、次の方です。ご冥福をお祈り申し上げます。

○昭和六十三年十二月二十七日没
三期園芸（故）沢村銀一郎
（滋賀郡志賀町南小松）

○平成元年一月十八日没
九期陶芸（故）児玉　正一
（草津市矢倉一丁目二一）

○平成元年一月二十三日没
二期園芸（故）山本城三郎
（草津市野村町六一二）

近江八幡支部活動状況

支部長　中嶋　庄右衛門

昭和六十三年度支部活動状況を報告致します。

四月九日憩の家に於て本部役員会を開催出席者六名

協議事項

一、昭和六十三年度定期総会開催に付いて（四月十九日中央公民館に於て役員会開催）

二、総会日程四月三十日九時ＪＲ近江八幡駅前大豊に決定

三、会計監査四月一日終了済にて監査報告あり

四、会則改正に付いて

1. 婦人部設置に付いて

五、慶弔の件

1. 米寿、白寿を節寿として表彰する

六、支部、県本部会費、支部本部総会参加者会費徴収の件

七、ふる里探訪に付いて（婦人部にて計画）

八、会報第七号発行に付いて（八月の予定）原稿は一人二枚六月中

四月三十日十時大豊大広間にて総会開催

来賓として遠路早朝より中川会長を始め市福祉伊東課長、南老連会長殿より丁重なる祝辞を賜り恐縮に存じております。参加人員五十五名

総会行事も定義ながら事業報告から始り決算、予算、会則改正と審議もスムーズに原案可決承認。特に本年は婦人部の新設七名の婦人委員が選任されまして一歩前進した次第であります。

六月十一日米原町県立文化産業交流会館に於て滋老大公開講座が開催、元ＮＨＫアナ鈴木健二先生の「今日本が求めているもの」と題して約二時間講演。当支部より十三名出席す。

六月二十二日石部町西寺児童館にて滋老大同窓会総会開催さる。当支部より十九名出席、地元甲賀支部の設営の努力によって盛大にて感謝の他ありません。

九、七月七日西元町公民館に於て会報第七号編集会に本部役員六名会合八月上旬発行予定にて若林軽印刷に依頼

八月二十二日第七号完成各学区別に配本す。

十月四日役員会開催出席二十名

協議項

1. 本部研修会参加者十五名選詮
2. 第三回親善ゲートボール大会開催に付いて十月二十日土山町かもしか荘予定人員二十名
3. ふる里探訪に付いて、婦人部にて立案計画、十一月十日、湖西湖北方面

十月十日滋老大同窓会第二回研修会沖之島沖の白石、多景島竹生島研修旅行参加者十二名

沖之島にて元沖之島小学校長の茶谷先生より琵琶湖と沖之島の由来に付いて約一時間二十分講演を拝聴す。

十月二十日第三回支部親善ゲートボール大会土山町かもしか荘に於て参加者二十二名

八時三十分桐原学区を最初に九学区をマイクロバスにて参加者を誘導し十時三十分かもしか荘に到着快晴に恵まれコート二面にて親善第一とあって終始なごやかに午前三試合、午后三試合と昼食時には食膳に一本付いてあって盛大であった。

詳細には又支部会報第八号に掲載予定である。

十一月十日八時市役所前集合、第一回婦人部主催によるふる里探訪参加者三十八名。

大津市葛川明王院、朽木村興聖寺、西浅井町つづらお荘にて昼食、午后余呉町館山寺、弧蓬庵へと川島氏の終始安全運転にて午后六時三十分無事故に帰幡宇野副会長の周到綿密なる研修計画にて参加者全員より研修が出来たと賞讃の声大勢にて来年度も是非実施されたいと要望あり詳細に付いては機会を得て婦人部より報告があるものと思われます。

十一月二十四日日野町文化ホールに於て滋老大公開講座ドラマと人間と題してジェームス三木先生の講演あり、熱弁にて感銘を受く。当支部より三十余名出席

支部講演会今年度の事業の最後であり講師も依頼決定二月下旬若しくは三月上旬の予定にて一般よりも受講を歓迎します。

湖東支部の活動状況

塚本　源太郎

湖東支部も結成（昭和五九年九月）以来早や五年目を迎えようとしている。会員数も当初は四一名であったが現在では七五名となり、組織の拡充と会員相互の親睦を図り、益々教養を高め地域社会のリーダーとして貢献するよう努力している。

活動状況

㈠、定期総会　昨年五月一三日八日市市県老人福祉センター延命荘に於て、第五回定期総会を開催し来賓として同窓会本部より中村副会長を始め地元からは、八日市市長代理、市議会議長、市老人クラブ連合会長殿など各位のご臨席を忝なうし、ご鄭重なるご祝辞を賜り恐縮に存じました。この総会に於ては六二年度の事業報告や会計決算報告並びに六三年度事業計画、予算案などについて審議され承認を得た。その後支部規約により役員の改選が行なわれ、支部結成以来支部長として支部発展のためにご尽力下さった畑中保治郎氏の後任として、不肖私の如きものが支部長の職責を引継ぐことになり、職務の重大さを痛感いたしております。改選の結果は次の通りである。

支部長　塚本源太郎　四期園
副支部長　周防　安次　一期園
同　大道喜一郎　四期文
県理事　畑中保治郎　四期園
庶務会計　山西　康雄　五期園
監事　河端　正夫　二期文
同　溝井　常夫　八期園
班長　中村　圭三　八期園
同　木俣　信一　六期園
同　竹村　善二　八期園
同　野沢　政次　六期文
同　浅原　甚吉　四期園
同　端　藤兵衛　五期園
同　山村太兵衛　六期文
同　森野重太郎　三期園

㈡、役員会　年間計画としては四回を予定し、必要に応じて随時開催することにしている。

六月七日　改選後の新役員会

六三年度の事業計画とこれに伴う予算案について検討した。尚会費徴収の件や県同窓会総会（六月二三日甲賀郡石部町）の支部出席人員の割当、県老人大学校公開講座（六月一一日米原町県立文化産業交流会館、講師　鈴木健二氏）の開催について連絡をした。

九月六日　支部主催の親善ゲートボール大会（九月二九日開催）について、チームの編成や試合方法等について検討した。

一二月二〇日　六三年九月県老人大学校卒業第九期生の支部入会について、名簿を作成し支部役員に連絡をとる。尚県同窓会会報（第七号）の発行について編集概要を説明し、一般会員からの原稿提出を依頼した。尚次回の老人大学校公開講座（三月一一日大津市民会館　講師　作家　曽野綾子氏）の開催されることを連絡した。

三月下旬　年度末の会計決算、その他次年度の事業計画や予算等について役員会を開催し、第六回定期総会の持ち方についても審議する予定である。

㈢、支部主催親善ゲートボール大会　九月二九日、第三回支部親善ゲートボール大会を蒲生郡竜王町グランドに於て開催した。幸い好天気に恵まれご来賓として、竜王町老人クラブ連合会長川辺伊三郎殿、竜王町ゲートボール連盟会長林与次殿のご臨席を得てご祝辞を賜り、各チーム熱戦を展開試合の結果全国大会出場経験のある竜王町チームが優勝の栄冠を獲得した。

以上が昨年中の支部活動の状況であるが、これから愈々年度末を迎え、一ケ年間を顧みて新しい平成元年度の活動計画を樹立しなければならない。そこで同窓会活動としてはどのように取り組むべきかを考えるとき、私は老人大学校在学二ケ年間の学習経験やこれまでに培ってきた自分の趣味などを生かす作品や、体験発表の場を持ちその機会を与えることにあると思う。こうすることが自己の励ましにもなり、老人の生きがいを感じさせることになるのではなかろうか。

最後に参考までに支部規約を挙げて置くことにする。

滋賀県老人大学校同窓会　湖東支部規約

第一条（名称）　本会は滋賀県老人大学校同窓会湖東支部と称し事務所を支部長宅に置く。

第二条（組織）　本会は滋賀県老人大学校湖東地区同窓会員を以て組織する。相互の連絡を繋密にするため郡市に分会を置き、更に各市町に班を設ける。

第三条（目的）　本会は会員相互の親睦を図り教養を高め福祉の向上に資し、地域社会の奉仕活動に努めることを目的とする。

第四条（事業）　前条の目的達成のため講習会、研修会、奉仕事業を行なう。

第五条（役員）　本会に次の役員を置き、総会に於て選出し任期を二ケ年とする。

支部長	一名
副支部長	二名
分会長	三名
会計庶務	一名
監事	二名
班長	八名

第六条（集会）　本会は毎年四月に総会を開催するものとし、

その必要に応じ役員会を開催する。集会は支部長これを召集する。

第七条（会計）　本会の経費は会費、入会金、寄付金を以て支弁する、会費は年間一〇〇〇円とする。本会の会計年度は四月一日に始まり翌年三月三一日に終る。

第八条（帳簿）　本会に次の帳簿を備える。

会員名簿、会計簿、記録簿

第九条（慶弔）　会員が死亡した場合は、弔電をお供えする。

第一〇条（規約の改廃）　本会の規約の改廃は、総会に於て出席者の過半数の議決による。

本規約は昭和五九年一〇月一日より施行する。

昭和六一年一〇月二三日　一部改正

昭和六二年一一月二〇日　一部改正

彦根・愛犬支部だより

支部長　野中　正

当支部は昭和五十九年九月に設立されすでに第九期生を迎えて会員数も八十二名に成り更に本年度より老人大学校も米原町に分校が増設され益々私共老人に対する勉学の場が増えると共に老大同窓会の会員もふえる事と思われます。

私共の地域はすでに御承知の通り東は湖東の山々に囲まれた地域より西は湖岸に至る迄の広い地域で彦根市、愛知郡、犬上郡と三つのブロックに分かれそれぞれに特異なる地形の中で、同窓会会員相互の連携もままにならないその中で早くも六ケ年を迎える事に成りましたのも各会員様並に役員様の御理解御協力の賜と深く感謝しております。

本年二月に支部の総会に際しましては御多忙にもかかわらず中川同窓会会長の御臨席を賜り更に祝辞を賜り厚くお礼申し上げます。

同窓会設立当時より支部長として各界に活躍され皆様より信望も厚く支部長として最適任で有りました近藤前支部長が病気療養のため辞任されその後任として不肖私が選任されその責任の重大性を痛感して居る次第で有ります。

同窓会の運営を更に進めるためにも新しい役員の方々と手をつなぎながらそれぞれの地域、社会人の一員として同窓生、同志で大いに頑張る心意義で取り組み「一言提言」を提唱し全会員に投稿を依頼し六月発行の第四号同窓会新聞に掲載しました。更に益々会の発展を図るために規約の一部役員数の変更も協議の結果承認され役員の増員を図り特異性なる土地柄を排除し充実した役員の皆様の御意見を拝聴し支部の運営を図りたく努力致す所存であります。

終りに際して皆様方の御指導御鞭撻の程宜しく衷心より御願

い致します。

当支部の役員の皆様をご紹介掲載さして頂きます。

支部長	野中　正	彦根市
副支部長	辻　幸夫	同
同	北川弥一郎	愛知郡
同	元持弥太郎	犬上郡
会計	川村　順茂	彦根市
庶務	中島藤五郎	同
会計監査	村田　穐	同
同	川村文美夫	同
幹事	小松藤五郎	犬上郡
同	西山弥一郎	同
同	西沢　正三	同
同	島村　三郎	愛知郡
同	広田麻治郎	同
同	田中　勇蔵	彦根市
同	山本喜一郎	同
同	田中　花	同
同	尾関　久雄	同
顧問	近藤辰次郎	彦根市

高島支部便り

支部長　岸田七次

高島支部も発足以来早や四年を経過しました。

現在会員数三十二名であります。昨年の定時支部総会は七月十八日新旭町の岡田屋さんの鶴亀楼で開催致しました。出席者十三名でした。当日は中川会長さんの代理として中島研修部長様御参会賜り大変有意義なお話し等拝聴し、尚懇親会の際には皆様に融合歓待の色々の面白い手品等実演賜りまして有難き次第でありました。

その席上本部で本年作成された同窓会名簿について各会員の氏名の次に生年月日も次から入れて貰いたいとの要望多数ありました。尚支部役員任期満了改選については一ケ年延長し明年行うようになりました。

卒業後久しぶりの同窓生との再会出来、和やかな雰囲気に包まれお互に健康で楽しく語り合い、生き延びる倖せをたしかめ合った次第です。

今後この有意義な心の支えの会を益々充実発展し会員相互の友情を深め度いものです。

湖北支部現状説明

支部長　宮崎程彦

平成元年を迎え、まず最初に昭和天皇の崩御に対し同窓会員揃って衷心より哀悼の意を表する次第です。昭和より平成元年を迎え滋賀県老人大学校同窓会の皆様方及び同窓会湖北支部の方々に私平素より一方ならぬ御世話になり又色々と御指導をいただきました皆様方のご健勝にお過しのこととお喜び申し上げます。

今年は滋賀県老人大学校は昭和五十三年七月十四日創立されて今年は目出たくも十周年を迎えるを期会報の発刊されることとなり其の期をお借りして湖北支部の現状をお知らせして日頃の支部無音を詫び致したいと思います。そして湖北支部の現状を認識していただき今後の湖北支部発展の資料にして行けばと考えますので支部結成以来の十周年を歳月を今一度振り替えって見たいと思います。

昭和五十九年五月十六日滋賀県老人大学校同窓会総会において、同窓会湖北支部が誕生し、初代支部長として推薦されましたものの責任重大さにたじたじとなり、いまさらながら引っこみがつかなくなって会員の先頭に立って何分にも受持区域の広い一市三郡に負けず各家庭に訪問し会員各位の健康と同窓会運営の監視の程を見参りました時、会員数は二十九名でした其後年月の流れにつれて六期、七期、八期と会員数は多くはなりましたが、何分にも高令者の集団でありますので、其点を特に考慮に入れて運営して参りましたが、寄る年令と病魔には勝てず県内各支部より比較して見ても心より尊敬していた親友学友の方々の早逝を借しみ結成以来一〇名の方を送り、ただただ各位の御冥福をお祈りした様なことで又幾る友人学友も病床の日を送っていられる様なことで湖北支部先途を猶予していました。それで各期の学友友人でもあります事を考え少し明細にして学友の資料になればと思いまして死亡された方々の御名前を死亡された期日を御知らせ致します。

期別	学科別	氏名	死亡された年月日
1	園芸	西堀大二郎	五七、五、二六
2	陶芸	清水　義一	五八、一一、一六
2	園芸	藤井　長生	六〇、五、三一
3	文芸	藤井　勝一	六一、四、二〇
1	福祉	勝木　副治	六一、七、一〇
1	文芸	下川正之造	六二、四、六
4	文芸	山本　仙松	六二、三、九
1	陶芸	藤井孫治郎	六一、六、九
1	園芸	中川　伝三	六三、九、一九
2	陶芸	田中　覚治	六一、四、二〇

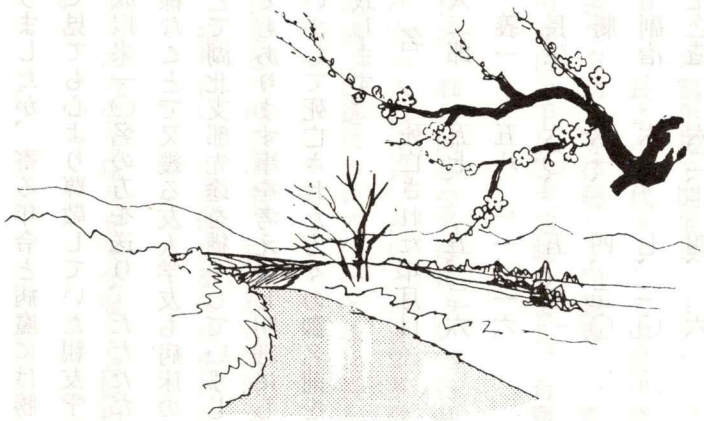
以上一〇名

此の様な現状が滋賀県老人大学校同窓会の流れでありましたので度重ねる支部長協議会でも現状では滋賀県では他府県の老人大学より引はなされる事を思うから中川同窓会長を始め事務局各支部長が一丸となり約一年間県会議員宅、県会議員控室事務局と各支部各員の歎願書を集計して議会に提出したりして猛運動を展開していよいよ十二月二十三日県会議決とのこと各支部関係者中川同窓会長を始め多くの者が揃って県庁議会議事堂に乗込んで採決の様子を各自の目で見て此れで滋賀県老人大学校の基礎が出来た此れで前途明るくなり益々老大も発展することだろうと大変喜こびそれまで色々の活動も皆な実ったと嬉しくこれも私一人の考えではなく老大各位も皆同じ考であった事と思います。

此れからは滋賀県老人大学校に対して県民の皆々様の御認識を新にして益々発展し県民の入学希望者も多くなり現在湖北支部も三十八名ですが、新設の米原校が出来まして第十一期入学者は湖北支部関係を見ても新入学者は四十三名と知り此れも湖北地方の今日までの地域的交通関係で希望者が少なかった事が実証されています。

此の様な高令者滋賀県老人クラブの方々も前途も明るく高令者生きがいを各自で生み出して今までの苦難の道も皆な希望と喜こびを持ち各自愛して皆な手を結んで楽しい余生を送りたいと強く感じます。

湖北支部も全員の現在の失望を忘れて強く生き滋賀県老人大学校創立十周年を迎える喜びを期し皆々の発展と、心より御協力御指導を重ねて御願い申し上げます。



真ね事でもしたい

一期生　下　司　　清

昭和天皇陛下の御成仏を、祈願し奉ります。

人はそれぞれ、考え方、ものの見方など、種々雑多と思う。ある新聞を読んでいると、〝霊魂信じられぬ人は、死ねばゴミ〟と言う題で、内容を簡単に照会すると、看護婦が四時間ほど見ぬ間に、元気だった入院中の老人が死んでいた、また近所でも、細君が買物に行ったわずかな時間に、元気だった主人が冷たくなっていたと云う、例をあげ、死と云う問題について、宗教の本を求め読んだが、信じられるものは、何一つ無かったと言う、霊の存在は、宗教家の飯の種で、霊魂は、肉体を離れて存在するとは信じられないと言う、この人は九十七歳だが、三十二、三歳のころ、斎場付近の小山を平地作業中、多くの棺おけ内にある死体を見て、死ねばゴミになること間違いなしと記していた。

これに反論した人は、宗教の説く死後の世界とは、生前の行為の戒めのために作られたものにすぎず、宗派によって、教えもまちまちですが、欧米では、百年以上も霊について研究を重ねている、そのデータや、近似死体験者の、証言の共通性などから、霊魂の存在や、死後の世界は実在する、と実証されている、（データは大英博物館保管）肉体は滅んでも、霊魂が生き続けるのは、空想でも、幻想でもない事実であると言う、テレビや書物で、丹波哲郎も、このことを力説している。

己を偉いと思っている者を、愚者と言い、愚かさを知っている者を、賢者と言う。

私は、大正から昭和、そして平成元年を迎えた、大正時代は雪国で育ったくらいで、余り記憶に残るものは無い、昭和になって、オリンピックのラジオ放送に感動した、陸上の南部、織田、吉岡、死闘の西田、大江、根性の村社の各選手、水泳では弱冠北村、前畑ガンバレの河西アナの声、スポーツ好きな私に、特に村社先生には、びわ湖一周駅伝競走に、途中まででではあったが湖西路を伴走していただいたこともあった。

平和な時代も昭和二ケタに入り波乱が起きた、戦争と言う地獄である、八年間の殺りく時代も遂に思いもよらぬ敗戦によって、餓鬼道に落ちた、そして畜生道、修羅道を歩んで来た、これが娑婆での六道（地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、仏）輪廻ではなかろうか。

これこそ、悪世沫法である。

終戦直後の内閣が、一億総ざんげと言はれたが、正しくその通りだった、人間は何の為にこの世に生れて来たのか、私は業

の積み重ねばかりで、ざんげの出来ないあわれな男である。よく余生と言う字句を見たり、聞いたりすることがあるが、人間の命には余りは無い、余っている人があるなら廻してほしいくらいだ。

経文に、父母に孝養し、師長を恭敬せよ、正法をもって国を治め人民を邪枉せざること、六斉日（8、14、15、23、29、30）に於て殺生をするな、云々とある、折角人間として生を受け終点近くになった今日、私はこの時代に生れた因果を信じ、業のざんげ今こそ正念場であると思っている。

近況報告

三期生　西尾公子

老大同窓会員の皆様お健やかにお過しですか。古人の諺に光陰矢の如しとか申ますが、卒業後早くも六年余りの月日がたちました。二年間の老大生活のお陰で親しい友人にも数多く恵まれ、その後も短歌や謡曲のグループを作り楽しく学んで居ります。老後の生活には趣味が不可欠と思いますが、何かを学ぶ事に依って老化の一途を辿る頭脳にも多少の刺激を与え、老化防止に少しは役に立つのではないでしょうか。

昨年私は拙い筆乍ら自分史を書きました。最初の切掛けは息子達に私の幼い頃の姿を書き残したいと言う気持ちでしたが、偶々大津熟年大学に通う頃「自分史の書き方」のお話を聞き、又丁度その頃ＮＨＫの生涯教育通信講座の中に「自分史」の課目があったので、昭和六十二年四月から六十三年三月迄受講しました。レポート提出は八回、各項目に分けて四百字詰原稿紙十枚宛を送ります。書いて居ると不思議な程次々と昔の事を思い出して、十枚と決められた枚数の中に纏めるのに苦労しました。私は満州で十年間を過して終戦に会い、夫を失って幼い四人の子供と共に身一つで引き揚げて来ましたが、子供達は父親の記憶を多くは持って居ません。その子供達の為めに有りし日の父親の姿を書き残したいとの希いもあって、私達の結婚生活の日々、終戦から引き揚げ迄の生活、その後の現在に至る迄のあらましを思い出すままに書き綴ったのです。書き終った時すすめられるままに「幾山河」と名付けて一冊の本に致しました。

思えば我々の年代の者は多かれ少かれ戦争の年代を過した事によって、随分色々の人生を知りました。その時々に見た事、考えた事、経験した事を書けば材料は尽きません。物を書く事も老化防止には大変役に立つと申せますから、皆様も是非自分にしか書けない自分史をお書きになっては如何ですか。

私達の周囲には八十才を遥かに越えても尚赫灼とした方が沢山居られます。同期の伊藤様は今も底力のある美声で謡を聞かせて下さいますし、北川様は今年も千株近く葉ボタンを作られ

た由です。坂田様は（まだ七十二才位の方ですが）毎日数キロを走り、先日の短歌会の日は八日市から坂本迄自転車で走って来られました。私の通って居るコーラスグループの指揮者大西先生は八十五才位と伺って居ますが、素晴らしいテノールで教えて下さいます。この方達を見習って健康と老化防止に努力して、人生八十年と言われる時代を、一日でも長く健康な日々を送りたいと念願して居ります。

尚大変自惚れた言い方をお許し願えるならば、私の小著「幾山河」をお読み頂ける方には誰方にでもプレゼント致しますから左記へ御連絡下さい。　ＴＥＬ三四ー一九四一　野村方

私の老後の暮し

三期生　北　川　喜太郎

一九八九年の新春を迎へ満八十歳の齢を数える事になった。顧りみれば、この八十年は、激動の時代でありその試練に堪えて来たが、これからの余生は、新時代に即応した活路を目ざし決して隠居気分に浸ってはならないと信じているし、幾多の事例を見聞している。又年輪を重ねるに従い体力が減退するのは自然の理で、それに対応した自分を意識することが大切な事であると思うのである。

私も老境に入り以来、「園芸と執筆」に取り組んでいる。野菜作りは、過去の体験と研鑽を活かし「無農薬と有機園芸」に挑み、その生産物を都住の知人や非農家の人達に試食味にと思い差上げると、その返礼には市販の野菜とは食味、風味が異い繊維が柔軟で甘味も富んでいると、喜こびの好評の声が寄せられ注文される人も増え、従って生産者と消費者との直結の輪が拡まり益々研鑽の意欲が湧き、消費者に喜ばれる生産物を作るよう努力している。

一方私は七十七歳の「喜寿」を記念して自分史に取組んでいる。過去の日誌と記憶をもとに市誌と県誌を読んだり、アルバムを拡げ若い時代の自分や旧友に思を馳せその人の消息も辿り往時を偲んでいる。同級会や同窓会又ＯＢの会合には支障のない限り出席しているが出席者が年々少くなるが、集まる人は皆健康な人で楽しく余生を送っている幸福な人達であると話し合っている。すべからく老年者は健康で個性に即応した趣味を身につけていると視野も広くなり各種の輪も拡がり、楽しい老後の生活が出来るのではなかろうか。外出する時は必ずカメラを手にする。急発展して行く地域環境の変遷を記録と共に残して置きたいと思う私生活の一端でもある。

最後に一言。それは「家庭の和」である。家族揃って和ごやかに毎日の生活が楽しく送れることこそ、最高の幸福ではなかろうか。これが近隣への輪（和）となり拡がりは限りない、と

夢見る私の近況である。

陶四会

四期生　林　信夫

昭和五十六年十月に四期生七十八名の学友と共に入学を許可されて陶芸科の一員となることが出来る。従来の二ヶ年は全く夢の内に過ぎた感じであった。電車通学の七名の同級生と貴生川駅から川田神社を拝して教室迄、大雨の日を除いて健康上の関点より徒歩通学となった。川田神社のうらの木立の中に鈴成りのアケビの実を発見した事も思出に懐しい、無事に卒業して七年になったが熱心な友は今尚大学院生？　として研究している友がいるが敬意を表する。卒業後、各支部毎の輪番制による年一回の日帰りと一泊研修会を実施している湖東三山を始めに大津方面、近江八幡、京都、水口等であるが特に沖の島での一泊の時の釣名人の早朝の収獲を宿の好意で早速にフライにして頂いた時の格別の味は忘れられない。去る九月大津当番の時は紅葉パラダイス一泊の折、たまたま紅葉の室内G.B場記念G.B大会があり、七年前に老大の課外授業で教えて頂いたG.Bの時のチームを編成して参加する事になり大活躍の結果幸運にも恵まれてコート優勝する事が出来た。陶四チームの意気大いに上った次第です。陶四会を益々大事にしたいと思います。

老大も本年度念願だった米原校が開校された事は私共に取っても大変に嬉しい事であり関係の方々の御努力に厚く御礼を申上げます。老大のバッチを大切に永々使用させて頂きます。

三太夫の金時計

五期生

仙台から月に一回東京へ上ってくる伊達家の老紳士が白縮緬の太い帯にからませている金鎖についている金時計がいいものらしいので、北海道帰りの巾着切りが忽ち欲しがり、二等車の中でやろうとしたが失敗した。その話を聞いた腕自慢たちが試みたが、いずれも老紳士に気付かれてしまった。ところが関西方の巾着切の一人がワテがやったろとみんなとは逆の上野駅から仙台へ向けて汽車にのった。例の紳士の隣りに席をとり、仙台にあと一時間というところまで粘ってから声をかけた。実は私は掏模で仲間からあなたの金時計をとってこいと云われてきたが、あなたには全くスキがない。日本一のスリと云う者が来てもきっと諦めるでしょう、と云うと、老紳士は殊の外上機嫌で、君は今までの中で一番いい男だと云った。そこで、その金時計は由緒あるものでしょうが、持ち帰って仲間うちで自慢し

たいのですが、売ってくれませんかときいた。老紳士はカンラと笑ってよろしいと売ってくれた。これで巾着切につきまとわれなくてすむと云った。さて仙台について席を立つとき、財布はありますね、というと紳士は懐を上から押えて、あるあると答えた。いっしょに改札口を出て巾着切はそれではお達者でと別れの挨拶をして人混みの中に消えたが、この時老人の懐中から財布も消えていた。（六三・一二・五）

あるく

六期生　仙頭利子

朝、寝床で血圧安定の運動をして、起床後は乾布摩擦、それから身支度。未だ簿暗い庭で深呼吸、冬至前の午前六時はちょっと寒い。

いよいよ出発ー。意識して背筋を延ばし、足幅を広く、腕は成る可く高く振って、オーソドックスな歩き方。こんな歩き方を教えてもらってきた私である。

歩いて、歩いて、元気で八十の峠を越えている老人が今、歩く道中で出逢う人は、バイクで新聞配達をしている二、三人の少年と、ジョギングをする中年の男性である。「おはよう」と声をかけると「おはようございます。小母さん頑張って」とはげましの挨拶が返り、私は、仄々とした感じになる。

気になる車の排気ガスは僅か二百メートル位の間で、すぐそこに近江神宮の境内が見える。

私は、樹木が生い茂って、空気のきれいなこの境内が好きである。拝殿までの道は一筋でない。全く平坦な道、傾斜のゆるやかな坂道、砂利を敷き詰めた巾の広い参道、参道から拝殿迄に一貫した計、百十三の石段がある。歩く道は、その時の気分によって決まる。足の向くまま。

拝殿に上がった頃、やっとあたりが明るくなってくる。お天気がよい朝は、東の空が赤く染まって琵琶湖も美しくなりよい眺めである。春から夏にかけて、ここでよく、出逢う老人と、日の出を眺めていっしょに拝殿を下りる。日の出は格別美しい。

帰りは、気分の転換にもなるので歩く道筋を変える。冬の茂みはちょっと物騒であるが、茂みの中できれいな空気を十分に吸うと、体中を洗い清めたような感じになる。人影がないと、長年してきた柔軟体操をする時もある。

宇佐山の頂上に鎮座する宇佐八幡宮まではちょっと無理だと思うので別行動にして、平生は鳥居の前で遥拝をしてくる。

こうして私が毎朝歩く所要の時間は四十分余りである。長い年月、よくぞ毎日歩いたものだと我ながら感心している。

私は只今まで、体に格別異状はなく健康である。健康な両親の譲りもさることながら、その基本の一つは、怠りなく歩いた、

適当な運動をしてきたその結果であると

〝あるく〟

いつでも

どこでも

いくつであっても

マイペースで　できる。

（私の経験）

成人病の治療と予防をめざす、

シルバー・エイジの運動療法の

基本は、歩くことに尽きる。

（或、大学教授）

心と体の、

バランスがとれる間に、

老年を美しく、実らせたい。

（私の夢）

善　隣　友　好

八期生　田　辺　　博

天皇陛下崩御　謹しんで哀悼の意を表します。

諒闇の年となりましたが、新しい世代の始まりに当り、身を潔め、心を新にして、内平かに外成るの精神に添い益々国運の進展に努めなければならないと思っております。

さて、世界各国では、急速に高齢化が進みつゝあるなか、わが国においても人生八十年時代を迎えるに至りました。これからの社会はこの高齢者によって構成されようとしています。この時我々は、ささやかな福祉に依存して閑居していませんか、貴重なる経験と、知恵を埋もらしていませんか、コミュニケーションと交通機関の発達によって地球は狭くなり、世界各国は、お互に協力し合う時代になりました。この時われ等高齢者は如何に対応すべきか、視野を広め、各国の人々と、政治、思想、主義、人種の別なく連繋して、高齢者の立場から、情報と文化の交流を計り共に生涯学習を行うことにより、国際社会時代に適応する感覚と、教養を身に付ける必要に迫られて来たのではありますまいか。

そもそも我国は、明治政府が、国是ともした、脱亜入欧の思想が欧米一辺倒となったお陰で、文明開花の実が熟し、遅ればせながら、やっと欧米列国と肩を列べられるに至るや、アジアの近隣国との交りを忘れ、これを無視し、或は侮蔑（少し言いすぎかも知れないが）する態度をとるに至ったそのツケとして、第二次大戦に敗北するに至りました。そして戦後は、アメリカの庇護のもと今日の復興繁栄をもたらすことができたこと、そのことを忘れた一部日本人のいることは残念でなりません。

今、私等は、わが国の極東における地位を考え、この経済成長が、世界平和に役立てられること、とりわけアジア各国の友に手をさしのべて、共存共栄してゆくことを考えねばならないのでないかと、柄にもないことをあれこれ、想いめぐらしていたとき、数年前、台湾から、台北中国文化大学教授、姚栄齢先生が、日本の老人大学を視察に来日された折、会談したのが縁となって、以来文通交流を続けるうち、姚先生の提言で、志を同うするアジア各国の高齢者が集い、お互に生涯学習を通じて友好親善の交流をはじめようと、亜細亜老人学友協会という団体を組織し、善隣友好の集が始ったのであります。そして日本が中心となって、韓国、台湾の同士等と相互交流すること既に五年、昨春四月には台北市において七回目の国際親善大会が開催され、日本からは六十人の会員とともに、之れに参加し交流の輪を広げて来ました。この一行の中には、わが同窓会の中川会長さん、近江八幡の中嶋支部長さんはじめ、大勢の老大同窓生の方も加わっていただきました。

今秋、この大会を日本において開催することになり、心はずませて準備にかゝることになりました。この団体は、各国にそれぞれ本部を置いて、自主的活動を進めつゝ、毎年各国の廻り持ちで交流の集を催し、今では大勢の友をえて、国際交流に大変役立っていると自負しています。日本本部は、不肖私が代表となり、各府県に支部を設置し、全国的組織に拡大すべく、関係の方々と推進に努めております。ちなみに滋賀支部は、わが老大三期生、大津の桑野大さんに支部長をお願し、そして既に老大同窓会よりも四十人の方々が参加下さり、友好の輪が広がりつゝあること大変うれしく思っています。会員みなさん方の御参画を切にご期待いたす次第であります。韓国、台湾の会員は、すべて老人大学の学生なので、共通の認識があり、親近感も一入深いものがあります。その上両国とも、日本語が通じ、対話にはいさゝかの不自由なく、充分意志疎通ができることは有難いことです。

昨春、台北における歓迎パーティの場では、日本の歌を、台湾の方が大合唱されるなど極めて親日的でした。そのとき、私が一入感激したひとこまを紹介します。

われわれ日本の会員が招待されたあるカラオケ喫茶の店での出来ごとですが、私の側におられた一人の中年の女性が、突然立って、かの日本の教育勅語、〝朕惟フニ〟から〝其徳ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ〟に至るまでを、すらすらと暗誦され、そしてにっこりと私は子供の頃小学校（台湾の）で教わったことを未だ忘れていませんと、話されたのには、吃驚するよりも頭が下る思いをしました。

最後に、一昨年の暮、台湾より林栄　さんという台北市老人大学の先生以下四人の方が、日本の老人大学を視察に見えたとき、わが母校を案内し、事務当局の接待で、奥村副校長さんは

じめ関係の方々と、会食懇談されるひとゝきもありました。林先生は戦後の一時期、湖西の和邇に在住されていた由で、かっての江若鉄道を、コンニヤク鉄道など呼ばれ懐しい昔話に花が咲きました。

林さんの奥さんが、前記の教育勅語を暗誦された方で、この方は未だ日本を見たことがないと話しておられましたが、日本語は、われわれ日本人と少しも変らない程上手で、3小学校の先生をされておられるそうです。

老人大学の想い出

九期生　間　宮　太　か

「光陰矢の如し」とはよく云われますが、月日の経つのは早いもので二年間の老大生活もみるみる中に卒業の日を迎えさせていただきました。あこがれていた老人大学へ入学を許可されよろこんだのも遂此の間の様になつかしく想い出されます。机を並べて講義を受ける楽しさは杳き日の学生生活を想い出し、生活科学を選択させていたゞいた私は、実習の日になると近江八幡の婦人センター迄出かけました。各自がエプロン姿も甲斐甲斐しく先生の御指導のもとに珍らしいお料理作りに挑戦したものでした。皆さんと一緒にいたゞく時の楽しさ、自分達の手作りとあってお味は格別でした。食物の添加物について又健康食品についてもいろいろ講義をうけ新らしい知識を身につけさせていたゞき、又手芸の時間には刺繍で飾ったクッション作りや和紙のちぎり絵も楽しい想い出として走馬灯の様に頭を馳け巡ります。別所の陸上競技場で蒼空の下、子供にかえりはしゃいだ日もありました。県外学習として大阪府立老人総合センターへも出かけ数多くの方達と交流を深め帰えりは万博公園の見学もさせていただき見聞を広めて来ました。一般教養の講義では、全国未亡人会長守田厚子先生よりお聞きしたお話の中で「過ぎ去った後は振り返えらない明日に向って希望をもって前進しましょう」とのお言葉、今もはっきり心の奥にいきづいています。夏休みに入ると頑張って作った作品の展覧会です。皆さんの心のこもった作品を見せていただき勉強させられたものでした。又或る時は延暦寺参拝に参加し写経にいそしんだ事も忘れられません。何と云っても一番印象深いのは修学旅行です。前日迄の雨もすっかりあがり快晴にめぐまれ最高でした。健康のありがたさを感謝しつゝ二台のバスに分乗して、なごやかな雰囲気の中、一路岡山方面へと向いました。備前藩主池田光政公が開校された閑谷学校見学、そこでは講堂の床がとてもよく拭き込まれてピカピカに光っていたのは忘れられません。まわりには今猶しっかりと組まれた石垣が残っていて建物はすべて重要文化財に指定され往時を物語っているかの様でした。一夜

明けいよいよ開通間もない瀬戸大橋にさしかゝりました。人間の英智を集めた世紀の大事業とだけあって科学技術の偉大さに先づ驚き吊橋の線の素晴らしさ、瀬戸の海の眺めの良さに唯々感激致しました。与島のパーキングエリアへ立寄って眺めた橋は又格別で、常盤公園の満開の桜も私達の目を楽しませてくれたものです。今となっては何も彼もがなつかしく心の一頁を飾って呉れます。お陰様で友達もふえ人間的に一まわりも二まわりも大きく成長させていただいたよろこびを何時も胸に秘めつつ地域に少しでも御恩返えしをさせていただき度いと念じている此頃です。同窓生の皆さんどうぞお元気でお過し下さる様祈りつゝ私の責を果させていただきます。

夢

一期生　丸　市　喜　好

人生は苦なり楽なり歩む結局は夢、私はその人生をすでに八十年も生きてきた。これから先き何年生きるかわからないが、元気で達者で出来るだけ長くと願っています。これからの人生は、いわば残夢というものである。そこには悲喜苦楽いろいろあるだろうが、凡人としてこの残夢を心ゆくまで味わって生きたいものだと願っています。

思いつくまゝに

一期生　熊　谷　清一郎

県老大を楽しく学んでから、早や八年有余となった。県内の老ク代表者または有識者と机を並べて勉強したこと、あるいは奈良一泊研修旅行などを思い出し、昔を偲んでいる。

私事であるが、こゝ二、三年前は持病のぜんそくが出て、病院通いをしていたため、心ならずも、同窓会行事や、公開講座にも出席できず、皆さんにご迷惑をおかけしたことを、申しわけなく思っている。最近は特有の発作もなく、快調であるので盆栽づくりや、ゲートボールなども結構楽しんでいる。しかし調子にのらず、健康には一層留意して、今までの分を取り戻したいと念願している。

講義の要点は、努めてノートしておいたので、この得がたい資料を大切に今後の生涯教育に役立たせたいと思っている。

生　き　が　い

一期生　石　川　まつ江

接骨院で脚を痛めた九十二才のおばあさんに出逢った。「もうなおったけれど向うへ行ったら四十九日の行をせんならんし、

三途の川も渡らんならんので、もうしばらく通って脚を丈夫にしょうと思って」との話。

このおばあさん編物が得意で、コタツ掛や座布団カバーを沢山編んで知り合いの人々にあげていられる。「昨夕も十二時迄かかって仕上げ今朝持って行って来た」「お上から戴くお金で毛糸が買えるので有難いワー」と。

死に対する心構え、日々の生活態度、誠に立派であると、つくづく感服している。

人間はいくつになっても、生活にはりと生き甲斐を持ちたいものである。

三期生　福　井　信　一

昨年はリクルート問題で政官界が揺れ、うやむやの内に新春をむかえ穏やかな新春と思いしが天皇陛下が崩御され御冥福と平成元年の御繁栄をお祈り申し上げます。

さて、人生八〇年台となり私もお陰様で満八〇才の誕生日を向える年となり健康でむかえられる事を祈念致しております。八〇年の人生何をやって来たかと振返って見て短気と思慮の浅いので失敗のくりかえしの人生であった様な気がする。最近特に神経痛で昨年十月初旬より深夜になると足腰が痛んで目ざめる日が多く困っておりましたが、お陰様で大分快方に向って来たので喜んでおります。寒さもまだまだ続きますので皆様の御健斗を祈ります。

随　筆

三期生　木　村　主　税

老大卒業してより早八ケ年が過ぎ去りました光陰矢の如しとはこの事を言うのでしょうか。

其の後老大卒業の方々にも各自其れぞれ体に合った生活をしておられると存じます。

私も其の後は地元の寺の総代として一昨年は客殿の建設、又本年は本堂の建築等で毎日多忙の日を送って居る次第です。

本菩提寺は去る昭和五十六年火災により焼失して先祖様に対して申訳無き事で有りまして壇家一致して本番にこぎつけました。億からの費用は大変な事ですが三百戸の壇家の一致の下本日を迎えて居ます。本年の十一月落慶法要の予定です。其の迄の頑張りです。書面の都合で終ります。

以上の様な事で有ります。　合掌

慕　情

四期生　島田　参志（寅治郎）

翼下には泰山眠り黄河見ゆ
故宮城貴妃絢爛の夢寒し
長城へ吾妻急ぐ濃紅葉
長城の望楼堅固底冷えす
落葉踏み太極券を習いけり
目のあたり人影凍る天安門
西太后栄華の月を湖におとし
寒雲り追れて羊売られゆく
眼下には黄土の大地冷えて見ゆ
夢誘う古都長安は冬景色
長陵路綿とモロコシ干す農家
始皇帝陵に凍蝶眠りけり
陵の道着膨農婦に土産買い
揚貴妃の妖艶映す風呂水涸
世を変えし史跡霜晴る華清池
山眠る十萬體の仏かな（龍門）
雁鳴くや九朝王都の夢が跡
月冴えて蘇州の慕情塔幽か
クリークに春待つ舟の静かなり

かけがえのない一度きりの人生を！

四期生　林　長夫

人生の道に完成はない。死ぬまで修業だといわれていますが修業とか、学習とか、特に最近生涯学習の必要性が国民の課題となっているとき、このことを実現しょうとすれば個々がどのように取り組めばよいのか、なかなか容易なことではないと考えるものです。高令化社会といわれるなかでいまの社会の認識では六十才や七十才では老人ではないと思われているが、現実は精神的にも肉体的にも活性化を図ることがいかに難かしいかと思われてならない今日このごろの心情です。まだまだ若い者には負けない、自己実現の喜びを持ちたいと頑張っていますが次第に消極的となり、いまは共に学んだ同窓のみなさんとの出会いと語り合いのなかで人間としてよりよく生きようと当時を懐しく、ある目的を実現しょうという気持ちを確立しなければならないと思っております。

最近思うこと

四期生　澤　せき

老大を卒業させて戴きまして七年にもなるかと思います。第一回の講座に滋賀大の先生にて外国からお帰りになった直後でありました。とてもよいお話を二時間通して承はりましたことを思い出します。又講座が県下各地で開かれまして何かと勉強させて戴きました。入学当時は不安な事もありましたが生活科学のみな様はとても率直で御立派な方許りで御座いました。又幸な事にお二人の先生にお目にかゝる事ができました。御無理なお願いを申し卒業以来日々大津草津へと通はせて戴き以前にもまして好きな道にいそしませていたゞき日々の暮しの糧となり頑張っております。若者は忙しい日々を過しておりますが調和して過したく少しは役立っている事に自信をもち乍ら無事に動かせて戴る事を嬉しく思っております。夕方帰りはおそく待ちかねる日々でございますが「おばあちゃんありがとう」の一言が良薬の様に思う此頃でございます。

老大への誘い

五期生　金山良吉

県老人大学米原校誕生を心よりお祝い申上げます。現在十一期生、光陰矢の如し五期生陶芸卒、今尚碧水荘にて陶芸を趣味の仲間達と楽しんで居りますのも老大での隣の出合が有ったからと考える時、私、地区の老人仲間を一人でも多く老大入学を推進する事が私達ＯＢの責任ではないかと考えます。交通の悪条件、私達の地区だけに志向者の勧誘に苦労します。幸い一昨年二名の入校者が本年九月卒業されるので共に力を合せて老大の認識を高め志向者を促がして一人でも多く入校をする事を目標にして居ります。高令化社会の対応、真剣に各人が考える時ではないかと思う。

思うまゝ

五期生　宿谷光次

県老人大学校も早や十周年を経、益々発展しつゝあります時同窓会員の皆様にも御壮健御精進御幸せとお喜び申し上げます。同窓会甲賀支部も丸市喜好支部長各役員会員の御熱意によりいよいよ進展し各地域老人クラブ活動の支柱となり育成指導に尽

くされます事は県の心に答えることゝ喜ろこばしい限りです。私も総会、研修会、公開講座に出席し暖たゝかい親睦にあづかりいつも反省と健康に努めております。人は学びつゞける事によって自らの若さを保ち生甲斐を高める事が出来、表情も生き明るいと云われます。平成元年の出発、高令者の果す道も多大なることを自覚して稔りある様精進したく祈念するものです。満八十二才を感謝します。

文芸学科感

五期生　山脇　義一

第五期生として二ケ年間県老大に学ばせて頂き、一般教養を主として文芸科に席を置き伊藤雪雄先生に短歌の一歩から懇切に教えて頂いた。下手乍らにも、どうにか短歌らしいものが詠めるようになった二年間に、忘れられないものは、席を並べて談笑した学友たちとの触れ合いと、先生の温顔である。

卒業後も其の中の大部分の有志の友達と毎隔月に大津に集って、先生をお迎えして、引き続いて御指導を仰ぎ、みんなで楽しく短歌会を催している。

〃百姓の衷しき漫画鳥おどし弓矢
　棄てたる姿を洒す〃

磯尾老人クラブ

五期生　芥川　徹

磯尾は忍者の里、甲南の人里離れた三重県境の辺鄙な山村である。人口は四五〇人、戸数は九十八戸、会員は七十八人で総人口に占める割合は一七・三%、五・七人に一人、高令化社会を二十年も早く先取りしている。七年前から圃場整備が行なわれているが、平坦な田は少く、高土手で三反以下の谷間の田圃が大部分である。われわれ老人は孫の守、保育園バス通学の送迎、田圃の水、除草の管理、山林の植林、間引き、枝打ち、運動場、公民館、氏上神社の除草、清掃、東海自然歩道の草刈り、整備等、職場に務める若人の部落運営を支え、老若が一体となって献身的な活動に努めている。

夢を追う

五期生　大西　つじ

眼が覚めた。今日も達者で有りがたい。予定通り家事に移る。ゲートに行く日、友が待ってくれている。我家は友達の遊び場。下手な俳句の投稿も終った。短歌教室へ誘って呉れる姪もある。夏の大きい私の玩具は六〇坪の畑、冬は頭で何か考えて書く。

三度の食事は献立も調理も我流。それでも八年間糖尿と戦って生きている。インシュリンの注射も自分で打って。でも小さい夢が二つある。四男京大助教授十三年、長女小学校三十三年現在教頭四年生、もしかして四男が教授に、長女が上に、こんなはかない夢を追いつゝ七十九才の婆さんは好きな歌など口ずさみつゝ今日も同じ農道を歩いて行く。

自由なクラブ

八期生　千　代　倉太郎

新春を迎え老大同窓会の皆様御元気で御過の事と拝察致しまして御喜び申上げます。私達の老人クラブは会則に従う事は勿論の事乍ら其の他の事に付いては自由奔放で例えばゲートボール一つに致しましても勝敗には決してこだわらず勝っても敗けてもクラブに帰ればまずは一杯と云った様なやり方です。

其の変り事業となれば町内三十六個のカーブミラーの清掃又道路清掃、町内縦横に有る花壇の草引き、又施肥等に、四十数名の者が一生懸命汗を流す一寸変った老人クラブですが、自治会長又役場の諸係の人から度々御褒の言葉を戴いて居る様な仲の良い老人クラブです。他の老人クラブの人が見られたら面白いクラブやなあと思われるでしょう。

爽やかな心と体

六期生　石　川　季　夫

長い人生だ。傘寿の峠は無事越えた。米寿の峯はいつどこで、どんな形において迎えるか、陰も形も見えない。人生八十年、如何に生きるか。個人は勿論、国にとっても大問題だ。これは老後が極めて長く、老化が進んでいるわけで、やがて老人ばかりで、生きるいのちをもてあますことになる。

老化現象は刻々と急速に進み、命の袋は傷んで交換も出来ない。私は老化の速度をゆるめる事こそ大切な道と思う。名誉も体面もすてて、一日一時間・一週五回、出来るだけ早朝、冷たい大気を大きく吸い手をふって歩こう。足腰丈夫に、血液の浄化へ。

思うまゝ

五期生　臼　井　良　江

つい此の間五期卒業かの様に思っていましたが、早や六年目となりました。二年間は身も心も張り合いが有り、我が老もわすれたかの様に楽しくありました。この間良き多くのお友達が出来た事は、何よりも得がたい幸せ者です。

唯今では月二回の老人コーラス、手芸、参加させて頂きます手芸もペーパーフラワー、リボンフラワー、アートフラワーとだんだん欲ばり楽しみにしております。

健康には私なりに毎日を大切に無駄なき様一日でもボケを防げる様念じています。

動き

六期生　田中一夫

老大陶芸科を出てから三ケ年が過ぎました。同期生の者も折角二ケ年も陶芸を学習してきたので有志の者が碧水荘の所長さんに話かけ陶芸を続ける事を要望したのです。所長さんも吾々の熱意を温く受入れて下さって、以前からAB二班の組がある上に更にC班を設置される事を定めて下さって、講師も信楽でも数少ない手ひねり伝統工芸士の神山先生を迎えることで一ケ月二日の実習日を定められた。是れを聞かれたのか七期生の方達その前二三名の希望者の方もC班に加入したいと言うことで今では賑やかに学習しているのが現在の姿であります。

老年期は成熟の時期

七期生　中沼宗寿

老年期は体の諸能力は衰えますが精神的にはますます成熟していく時期でもあります。肉体的老化と精神的老化は必ずしも比例しない道徳的な判断力円満な人格性人間関係の調整力など精神的能力は心がけ次第で発達し続けることを明らかにしています。年をとったからとてすべてが下り坂になるのではなく、人間はかえって老年期になってこそ経験、精神において見事な成熟をとげ人間としての完成の方向に一歩前進できる老人生活への期待と強い前向きの姿勢をあらわしている。従来老年期といえば人生の終着駅というような消極的なイメージを描きがちだったしかしこれから増加する高齢者の幸せを実現するには福祉面での充実はもちろんのことそれ以上にまず老人自身はもちろんのこと、すべての人の心から老年期の消極的なイメージを払拭し老年期を人生の完成期すなわち人間としての円熟期であるという積極的イメージに切りかえていくことが必要であり、そこからこれからの老年期を心ゆたかに送るためのさまざまな方法発想が生まれてくるのではありませんでしょうか。

私の提言

五期生　石田義雄

平成元年、心新に平成の夜明を迎え、先づ昭和天皇崩御に際し謹んで哀悼の意を表し、激動の昭和から平成の時代に入った歴史的なる節目の時、自己の仕事と社会との連けいは如何にあるべきかを想う時、時代の要請を認識し適切に対応しなければならぬと痛感する。

冬来りならば春遠からずの諺の如く、生甲斐の追求の中に高令者の存在を誇示するためにも、七十代は旅行と短歌を強調する次第。

私は卒寿の年迄長寿を全うしたく念願し、長命こそ高令者社会の中に於ける功労褒賞であるとの観点より社会が高令化することはまさに祝福すべきであると提言する次第である。

短歌五首

海沿に続く畠は赤々と柿の熟れたる山陰の旅

ほのぼのと心に抱く追憶の深き絆に我生きる日々

老いらくの愛はすばらし我が日々に心ときめき生甲斐覚ゆ

ひたすらに老いてときめく此の日々に恥じることなし我の生甲斐

元号の平成の御代幕開く平和誕生ニュース聞くなり

町内研修漫歩

四期生　後藤猪三郎

栗東町蜂屋老人クラブでは変貌する町の開発や躍進について知識を得ようと、研修会を実施しています。昨年七月には町議会定例会一般質問を傍聴し住民の意向を町政に反映する質問や、行政が効果的に運営されている状況など見聞しました。続いて町立図書館を見学、館内は整然として書架や図書の多いことなど、知識向上の場として最適だと感動しました。

憩の家で昼食をとり、国際情報高校や、自然の森など、開発地の見学をし新しい施設など満悦しました。こうして一日の研修も無事終り疲れもなく会員の皆様から好評を得ました。

十一月には都市化に伴う水質汚濁が甚しい現在、琵琶湖流域下水道湖南処理場の視察を行いました。この施設は草津市矢橋町にあり面積は六三・七haの広大な地にフローシートの完備には驚きました。生活する上にはこうした環境改善も時代と共に当然なことと思われます。午後は町内東方山安養寺「真言宗」木造薬師如来坐像や石造十三重塔、国指定文化財など参拝しました。このお寺の裏山には、有縁の方々が御奉納された石造仏西国八十八ケ所の霊場めぐりがあり、一仏毎に参詣させていただきました。

その他クラブでは、農園事業も行っています。今後も健康に

留意し幅広い研修や行事を続けたいと念願しています。

三期生　嶋　　鉄　男

高令化社会の到来!!　若い人達で新人類だという人たちは、私たちのような高令者の存在を、今どのような考え方、見方をしているのだろうか。

老人のひがみではないが、高令化社会の到来だ。世界一早いテンポで高令化が進んでいるなどの記事や、言葉を耳にするにつけて、何か老人になったことが、若い人に大きな負担をかけ、悪いことでもしているような変な気持ちになることが、しばしばある。

いやこんな考えを持つこと自体冒頭に書いたような老人のひがみともいうべき愚痴なのだと気付いた時には、よし何か世の為人の為になることを実行に移してみようと考えてみたのだが、果して何がよいのか、手に届きそうなことをみつけることに困惑し、やっぱり駄目な老人なのかと、ふさぎ込む日が続いたのだった。

こんなとき老人大学校の存在を知り、入校させて頂いたのが恰度昭和五十五年の十月であった。陶芸学科という未知の世界に参加し無我夢中で、粘土との斗いがはじまり今年で満八年が過ぎた。ようやく陶芸の入口まできたときには、既に七十二才になろうとしている。正に高令化社会の真只中に、うろうろしている毎日であるが、何事かを通して常に、信念と自信に満ち、希望を持って、若い人達の仲間入りをし、せまりつつある高令化社会に対応したいと思う。

ハリンサバのこと

五期生　川　嶋　　勇

昨年の暮れに京都の知人から、「ハリンサバのふるさとを訪ねて」なる一文を戴いた。

「ハリンサバ」は、この辺では「ハリンコ」とか「ハリボテ」と呼ばれていた小魚のことで、体長三cm位で背びれと胸の辺に一対の棘が生えている淡水魚で清水の中にしか住まない。今は絶えてしまったが、子供の頃、附近の小川を堰止めて「掻い採り」をすると「フナ」や「モロコ」「ドンコ」などと一緒に沢山採れたものである。

文面では、愛知川方面の湧水に二ケ所、現存する「ハリンサバ」を訪ねて、その生態が肌理細かに描写されており、作者の自然を観る眼の暖かさが感じられて、ほのぼのとした思いであ

った。

それにしても「ハリンサバ」とは聞き慣れない呼び方で、正月に老人クラブの初寄りで尋ねてみたが、殆どの人が知らず、なかには「ソ連の収容所」かなどと言う人もいる始末、正しくは「ハリウオ」「ハリヨ」、北陸地方では「ハリサバ」と呼ばれているようで、訛っていろいろの名が出来たものと思われる。

沢山居て、無造作に採れる時には何とも思わなかったのに、絶滅してしまってから、しかも県外の人に言われて今更のように「ハリンコ」を懐しんでいるこの傾である。「ハリンコ」とまでは行かなくても、せめて祇王井川に、金色や朱色の鯉が帰ってきてくれたらと溢々思う。

私の心構え

五期生　大西憲司

老人が社会活動に参加するためには、常に健康で豊かな心づくりが必要であると思います。私は現在、青少年育成指導推進員や少年補導委員であります関係から青少年の健全育成や、非行防止活動を、若い方達に仲間入りをして行なっております。また高齢者として、老人会活動にも参加いたしております。そのために次の三つの事を心構えとしております。その一つには「老い」を正しく認識すること、これは老いることが衰退することであるというような消極的、悲観的にとらえず、残存能力の再開発を考えております。そのためには、無理をしない自覚的な生活を続けることを考えております。その二つには、適切な生活環境をととのえることであります。これは、自立的で健康な生活を長く続けるために、住居を改善したり、生活様式をかえることも必要でありますが、自からの残存能力を活用しょうとする意欲と訓練が、さらに必要と考えます。その三つには、精神面の働きであると思います。これは、人と人とのつながりの中で、互に援助し合いながら生活をしていくことで、親子の間だけでなく、社会全体の中でも進めていくべきであります。つまり老いも若きもライフサイクルのからみ合いを大切にすることであると考えています。以上三つの心構えによって、自己実現や社会的連帯を求められる活動が推進できることを望んでおります。

所感

六期生　西田三郎

老大を卒えて早くも四年。爾来地域の老人会或いは連合会とそれぞれポストを頂き、老大で学んだ一端を果たす事が出来た。

まだまだとも考え、周囲からももう少しやれとの事であったが、昨年来の狭心症で無理も出来ず、好きな盆栽と囲碁を楽しみ、ゲートボールも適度にという現在です。

短期の経験であり見聞だが老人クラブ活動に於いて、集会の場所と運動場の確保が逐年増加する会員数を考える時、まことに大きな課題である。次にリーダーであるが出来るだけ多くのポストを設け意欲的積極的な人材を適所に求め活性化すると共に次代の老人クラブ活動の基盤を整備する事が望ましく、適度の交代も必要である。

老人は積極的に精神面でも体力面でも健康な余生を過ごす事が一番幸せである。その為に老人クラブは共同の目的を達成するための組織であり拠点である。

老人の医療費の問題は深刻である。二一世紀に向け大きな課題である。京都市に於いては「高令者サービス推進会議」が設置される事となったが、厚生省が六十二年以来推進指導するところである。

医療費の節減はまず老人の健康保持が先決である。老人クラブ活動を通じ健康な老人の比率を高める事が一番有効である。

車の両輪の如く、爾後の老人福祉の充実と共に予防的手段として老人クラブ活動の充実のため温い理解と協力を望みたい。

銅鐸と人生

七期生　石井　也尺寿

近江国安国郷野洲に住む老大ＯＢの私、人生六九年の年月は去り街の変り行く今日を身体で知りました。銅鐸出土致しました山里は子供の遊びの里でした。今から六五年前の事です子供達が城山で土を掘って居りました時お城の旧跡から金具が多く出土しました。お城の屋根のカザリリンドウが多く出たのです。今年から約二六年前に新幹線工事用に銅鐸の里の城山の土砂を取りました時十個の銅鐸が出土しました。又明治十四年には十四個で合計二十四個銅鐸で日本一で近江の野洲の街と成りました。大岩山古墳郡として国から史跡に成りました。子供も大人も野洲の町を愛する住民、古い街を大切にして行くことと思い安洲の街を愛す天保一揆江戸幕府事変も知る人ぞ知す記にあり。幕府勘定役「市野茂三郎」一行の丈尺度の事項で甲賀郷住民と野洲三上村庄屋土川平兵衛この事変は天保十三年十月十五日甲賀郡森尻村矢川神社の森より動き出した農民二万人役人に協力す庄屋の家屋をこわして栗太。野洲の農民が年貢を増やす役人非道をののしったにすぎなかった。農民は結束による一揆にうったえる外に途はなかった徒党は、目的を果しても極刑が待っている、役人の泊まって居る三上山麓の陣屋を包囲した農民の目的、顔色変ったしかし首謀者は許されず検挙され三上村庄

屋土川平兵衛、市原村庄屋田島治兵衛等石部の宿で唐丸籠に入れられて江戸に送れ又達島の庄屋栗東五兵衛も農民のため死んで行く。

次回は平宗盛焉の地です。

生きがいを求めて

七期生　林　愛子

此の度行政の御配慮と皆様の御支援を戴きまして不肖私もお蔭を以って県老大第七期生として先輩及同期の諸先生の友情を以って御指導と交流を戴きまして楽しく二ケ年の課程を修了出来ました事を心より御礼申し上げます今や二十一世紀に向って老令化社会の到来に備えて私達自身に於いて生がいを造り出さねばならないと思います。幸い同期の先生方より幅広い交流を受け講演会に又社会研修等の勉強を致し乍ら旅行も出来まして年令に関係なく啓蒙の一端にもなり世間を見る事の人間生を得る事は非常にすばらしい生きがいと思います。又郷土にありましては互の趣味を生しダンスの教養を受けるも良し、ゲートボール競技に参加するも良しと思って居ります。尚又折にふれ清浄なる寺院に於いて永唱の奉賛に依り神聖なる一時を得る事も出来る事は私の人生に楽しみを一段と感じる今日此の頃で御座います。生がいとは先ず健康でなくてはなりません。健康の泉として各種活動に参加し自分の健康を維持に務めたいもので御座います余生の人生を楽しく、生がいを求め皆様の御多幸を祈念申し上乍ら筆を終ります。

私の思うこと

八期生　田辺平吾

現在高齢社会になって来たと言えるが、まだこれ以上に先進諸国にも例をみない速さで迫ってきているとの事が老人問題が出る度に新聞雑誌等で報じている。私の村でも老人（寝たきり病人）を看病しつゝ日夜つかれきっているお嫁さんが四組あるが外部からみていると大変だなと思っている。感心するほど看病しておられる。病人にしてみればぼけているので何を言っているのか昼も夜も同じ事、仮に病人のお家をA家としますA家のお嫁さん曰く「私の主人の弟妹等に現状を話すと（他家に行っている方）「あなたは両親がいて老人になり又病気でもしたら看病する気持があればこそお嫁にきてくれたのとちがいますか」と言ってあいてにしてくれない。もう少し言い様があるのにほんとうにかなしい事です」と私に言っておられたがこれは一例にすぎない。外の家でも内容は異なるも看病するお嫁さん

にして見れば同じらしい。社会福祉の方又保健婦さんが時折尋ねて来て激励の言葉を言って下さる様ですが長くなった人生、長くなった老後を如何にして快適に生きるかが問題であると思う。まづ健康、何はさておいても体に気をつけて暮らさなければいけない。地区の老人会其他指導する団体は高齢社会に向っては病気にかゝる前に健康管理を積極的に指導することが必要であると思う。今、私は家内と二人暮し何時どうなるかわからない。週一回ほどは他家に嫁いでいる子供から電話があり体はどうもないかと言ってくる。お互いにはげまし合い、たえず健康管理を話し合いつゝ暮している。

随想

九期生　寺村　藤太郎

ゲートボールだけでは如何に健康と親善のためとは言え、些か物足りぬと思って、民協の総務を預かりながら少し無理かとも考えたが、幸い入学希望が叶えられて、二ケ年間貴重な研修を受けることが出来て感謝している。

激動の昭和の御代は去って世はまさに平成の時代を迎えたが、これからの時代は独善の生活向上ではなく、心豊かな真の世界平和を願う立派な人生観を最終目標として、精進して行くことが求められるのではなかろうか。希望は未来への光明として人間を勇気づけると言う。年はとっても若い気で力強く生きていきたいものである。

風車と花菖蒲の町に住みて

四期生　森　三郎

私の町新旭町湖の水質浄化に十八メートルの風車が回る水車村。幅十五米で七粁もの美しき湖周道路、湖岸には六月ともなれば三十万本の花菖蒲が咲き満つ風車と花菖蒲の町です。地場産業ではクレープ織物で全国の八〇パーセントの生産を誇って居ます。

私自身長い都会生活から不慣れなまゝ農業と綿織物に糧を求めて日々多忙な生活に耐えて来ました。

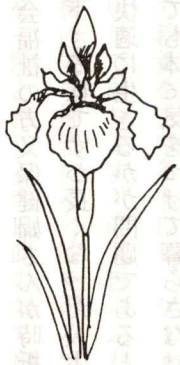
しかし人生健康な内に老後の生がいを求めたく趣味の俳句と老後教育を受けたかった。幸にして県老大文芸学科四期生として入学の栄によくし、五十八年卒業と同時に即在学中の書道の師三原博先生を慕い、滋賀会館三原書道一門に入り以来四ケ年間会館に通い続けた。結果的には六ケ年の長きに教を受けた事になる。この間の長きに笑顔で送り出してくれた妻や家族に感謝で一ぱいである。

書道にあって若い人達との親交は又愉しい日々でありました。在学中諸先生の御指導を守り切れるものではないが地域えの還元を少しでもと新旭町老ク連会員千二百名の事務局へ非常勤で奉職させて戴きました。現在では地元老人クラブ百四〇名の御世話をさせて戴いて居る。

多くの方々との親交も大切であるが趣味を生かす事も大切だと思います、俳句を初めて二十年に成りますが、上達しないまま作句を続けて来ました。現在大津藤本映湖先生の花藻誌に会員として投句御指導を受け又某紙のローカル紙面へも趣味として投句して居ます。選者諸先生の御指導には心から喜こんで居ます。

七十歳に今一歩の私、人生八十年迄まだ二十年間少し足の痛みは有るけれど、健康を喜こび地域社会への公益事業への協力参加、又一面折角御指導を受けた、かな書道を生かしすきな俳句を楽しみつ、尚老後の生活に仲間との連帯感を生かし意義ある老後でありたいと願って居る毎日の暮らしです。

最後に老大卒業生の諸兄姉是非共風車と花菖蒲の町へ遊びに来て下さい。



ひと節こえて

九期生　木村三良

去る年の九月二十三日、二ケ年の学習を終えて、めでたく老大の卒業式を迎えることゝなった。

初心にかえって、ひたすら学ぶことを再現し得たことは、欣快というべきことであった。

卒業証書の巻物を斜めに構えた記念写真をみると、童心甦えるの若さが滲み出ていてユーモアがある。

卒業生総代として謝辞を述べた生活科学の田中さん、女性の長老と聞いていたが、どうして、若々しい禀とした態度は、お見事。

謝恩パーティーが、滋賀ビルで催され、和気靄々のうちに、憶い出に花が咲いて、別離を惜しむ。昔も今も変りはない。

園芸の辻先生が一席、皆を励ます言葉を賜わった。

明治四十年生れの稀にみる矍鑠ぶり。達者で長生きする秘訣を説いて、くよくよするな、早寝早起き、梅干五ツ（小さい梅でしょう）。宴酣にして中座し、卒業記念旅行に出かけた。

前々からの話が煮えて、園芸、生活科学両科の合同となった。その賑やかなこと。

S・K・Kの若いガイドさん。ベテラン顔負けの万才ぶりに、皆打ちとけて楽しい笑いを運びながら、山代の雄山閣へとむか

う。途中、熊坂長坂関所で記念撮影。まむしの黒焼を購めたものもいたかな。

宿では、女性のいでたちが粋で赤い帯〆めた浴衣姿は、婉に艶めいて若さに弾んでみえた。

辻先生からは全員にお盃を賜る。盆栽学と長寿は、密接な関係にあるようで、感銘一際深し。

女性組は全員、大部屋に集合。枕を並べて怪談に一夜を明かしたという。

翌日は、ユートピア大観音にお詣りして、武運長久を祈る。もう助けて下さるのは観音さまだけ。この金ピカ慈母観音様は、建立の日も浅く、青空に映えるお姿は、慈愛に溢れて実に素晴しい。

卒業記念として、憶い出にのこる旅行をたのしむことができた。園芸の伴、高木両幹事さん、生活科学のフーさんに、改めて感謝

かなしみ

私たちの園芸学科からは、在学中既に、三名が他界されている。自然の大法則は避けて通れない。

去る十二月。土田悦郎さんが亡くなられた。しらせをうけて焼香にかけつけ、永遠の別れを惜んだ。

土田さんとは奇妙な出合いで、体育関係の先輩として、県文体で指導をうけた。また膳所の先輩でもある。入学式のとき、学生代表の答辞をされたときの姿が彷彿として偲ばれる。一年間、委員長としてお世話になった。はじめ、級生の名前が覚えにくゝて弱ったと老境の悲哀をこぼされていた。

勲五等もその年に授賞された。卒業記念アルバムを所望されたのもまだ記憶に新しい。

九月中頃、甲南病院から私に電話して、元気な声だった。懐

かしい写真みせて貰った。卒業式にも卒業旅行にも行けなくなった、皆によろしくとの声を残して逝った。いずれ、空籤なしのこの人生、またそのうちに会うこともあるでしょう。

さとり

過日、老大の教養講座で、人間生きている間は、積極的に社会参加が出来、老後は人の厄介にならないで、コロリ参らせて貰うことが、一番倖せだと。そのためには、日頃、その心掛けで、摂生に努めることが大切である。目標は、一二〇才を目途に、頑張る計画を樹てなさいという。

大学二年間で、一般必修教養講座として、多彩の先生方から、それぞれ、お話を拝聴する機会に恵まれ、それなりに修業ができたとよろこんでいる。

共通していえることは、対象が老大生である限り、老人向きの話になり、対処の仕方、生き方、指導のしかたというところに要約できるようである。

二〇〇米のトラックを走るのと一、二〇〇米を走るのとでは、自ら走り方が違う。長距離に耐えるよう息を整えて、無理をしないよう頑張るのがコツだといわれている。まだこれから五十年、生きられると思うと、いさゝかうんざりしそうである。

しかし、前述のように、達者で人に迷惑のかけない生き方ができれば、これほど倖せなことはないといえる。無理しないではたらきながら、自分に適した遊びをこしらえて、これからの人生をエンジョイしたいものである。

高令者の生きがいに思う

八期生　安倍　勉

老人大学校も昭和六十三年十月より米原校舎が開設され、第十一回の新入校生三〇〇名が入校されたことは誠に慶賀の次第であります。

われわれ老大卒業者は急速な高令化社会を迎えるに当り、これに対応する能力の開発や環境の変化に対応する知識の修得や地域社会のリーダーとしての生きがいのある充実した、しかも価値ある余生を営む基礎的学習の修得の教授を受け入校し卒業した喜びを一入痛感している昨今であります。

総理府の調査によれば生涯学習の希望が八〇％近い高率であることは長寿社会を身近かに痛感している証拠ではなかろうか、しかしこれに対応する施設の貧困或はその内容に疑問がある者も又高率であります。

昨今は各地域において公民館施設を利用して老人クラブか老人大学校を開設して地域に応じた学習内容に取り組んでいることは慶ばしい限りであります。

生きがいは他から求めるべきでなく自ら求めるべきであろう

が、われわれ老人は如何にして生きがいを求めるべきであろうか、その手段、方法もむつかしい。個独老人の増加や寝たきり老人、痴呆性老人が増加する現在、その生きがいを強く求める必要があるのではなかろうか。家族制度の改変により老人の看身の狭い生活状況を聴くことは痛悼に堪えません。家族の一員としての老人に対するよき理解を得、一家団楽の生活を望んでやまないのであります。

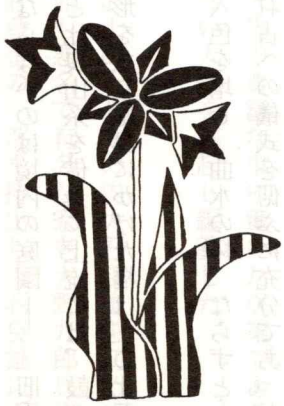
この様な現状を聴くことにより老人クラブとしてはお互が助け合い乍ら語らう機会を持つとか、自らの特技の生涯教室（手芸、園芸、文芸、囲碁、カラオケ教室或は詩吟等）により交流を深め、笑いと物を作る楽しさにより生きがいを与えるべきではなかろうか。

当町学区に於ては小学校高学年生とのふれ合い教室を開設され、老人が指導者として藁作業（縄ない、草履作り、〆縄作り）等も実施され或は老人個々に於て正月用の盆栽の指導を受けられたことは共に老人に対して真の生きがいを与えたのではなかろうか。又高月町の村おこし運動の実績と雨森普州氏の遺品館の見学等も行ない老人クラブとしての実施しなければならない奉仕、健康、教養、親睦等の行事を実施することにより相互扶助して長寿社会に対応する施策を痛感し老大卒業者としてはよき指導助言をしてリーダー的役割を果すことが使命であることをつくづく考えさせられる昨今であります。

老大同窓会として年に一～二回の親睦旅行が行なわれ交流がなされていることも頼母しく存じます。昨年は沖島の民宿で一泊し湖上の各島めぐり（竹生島、多景島、沖の白石）を致し最良の交流の機会であったと感謝しています。今後共この様な企画があれば幸甚と思うと共に同窓会としての絆を強める由縁ではなかろうか。

幸なるかな老大八期会は老大生として集団社会の一員として連帯行動する態度、能力の発揮できる校風こそわれわれに果せられた使命であることを自覚して、昭和六十一年九月に発足、各学科は異なるも八期生としてその絆を創り卒業後も親睦交流は勿論在校中の教養の継続に励んでいる次第であり、在校中によき指導者と巡り合いよき仲間と知り合い語り合うことの出来たことを感謝している次第であります。益々その絆を強め乍ら同窓会の礎とならんことを祈念するものであります。

先輩同僚各位の「平成」の新時代に当り益々の御健勝と老大生の誇りをもって地域社会の発展に寄与されん事を乞い願う次第であります。



ふるさと探訪

二期生　宇　野　よしゑ

本年度発足した婦人部最初の行事としての「ふるさと探訪」研修の旅に出た。

時、正に秋、酣の好季節　――

九十九折の花折峠の難所を越え安曇川の渓谷に沿う　ひっそりとした山里の葛川明王院へ着いた。バスを降りると先ず朱の橋が森閑とした山に映え印象的だった。

平安初期、相応和尚が回峰行の道場として創建したといわれている。境内は鬱蒼と茂り合う老杉と苔むす石垣など霊場としての雰囲気が漂う。

桂の木に刻まれた不動明王は明王院の本尊となっている。

☆幽暗の堂に鎮もれる不動明王
　樹樹も霊気の　けさ保つ

今尚比叡山回峰行者は葛川参籠を最後の仕上げとして、「行」のためこの山峡へと歩み、道に跪ずき合掌して迎える村人に、珠数で頭を清めていく――。

車は近江耶馬渓と言われる朽木渓谷から尚一キロの山道を行き、名刹興聖寺に着いた。山門をくゞって真直ぐに敷かれた石畳の参道の正面に本堂、その左右に庫裏鐘楼が立っている。心静かに詣でしばし佇む。正に優美　尊厳　静寂の伽藍である。然し何といっても見逃してならないのは境内の庭園――　旧秀隣院である。安曇川の清流と比良山系を借景に上流には、鼓の滝、下流は曲水、池は鶴の形をなし亀島にかけた橋は　の化石という。

折しもの時雨に紅葉は一入色を増し、曲水の杯、ならずとも真赤なもみぢ葉が美しく流れ古への儀式を偲ぶに充分であった。

☆秋深き朽木渓谷めぐりゆき
　紅葉に染みる山に息づく

尚も車は紅葉する山々を湖北路へと、ひた走る。いきなり眼下正面に竹生島が浮かぶ。神秘的な山と湖、歴史の宝庫、菅浦に着く。

入口には四足門が今尚残され中世組織の一端を知る事が出来た。

☆菅浦の古き掟を聞き止めむ
　茅の四足門孤高として立つ

小雨にけぶる静寂なひと時――

恰も刻が止ったかのような幽玄の世界に浸る。

道鏡に追われた淳仁帝が湖上を逃れられ、その御持物を入れた葛竜がこの岬に揚げられ葛籠尾崎と呼ぶ様になったと言う。その由緒ある名にちなんだ「つづらお荘」――　国民宿舎で、休憩。――　昼餉のひと時をかこむ。

奥琵琶湖の自然の中で歴史に出あいつつ、心ゆくまで楽しく語

り合う。

又バスの人となり山又山、薄暗いまでに茂り合う樹林、時雨にひときわ彩る紅葉をふみ分け大箕山の中腹を越え菅山寺を拝し、なだらかな丘陵が田園地帯に落ち込むあたり、山を背にして孤蓬庵にたどりつく。白い玉砂利の参道を行くと山門、奥に本堂書院がある。これは近年新しく建てたものだが、庭園がよい。南庭は枯山水、東庭には池があり自然の形が巧みにとり入れられていた。ここは遠州好みであるから宗教の道場というより別荘といった感じで、趣味と実益を兼ね持つと如何に人生が楽しいかを教えてくれる寺であった。

今日の旅は相当なスケジュールであった。然しこうした会でなければ得られぬ全くの研修の旅。ガイドは会員で。各自或程度の事前学習はしてきた。

老大の友、みな共同学習の形でデスカッションしつつ一名刹を、歴史を、自然風物を学びとる事が出来た。又未知の世界にもふれ意義ある旅であった。時雨する秋の日は暮れ早く一路帰途についた。

☆山深く近江の名刹訪ねゆき
　老いを学びて　明日を開かむ

近江人物誌を編纂

四期生　畑中　保治郎

人として此の世を成したもの丶余生幾年も無い此の身顧みて過去八十七年間世の為人のためどれだけ尽して来たか？……嗚呼しまった。これでは御先祖に申訳がない……　では今後どうしたらよいか……　そうだ若人の為人物誌でもと考え一昨年竜王町人物誌を編纂し全戸に配布したが多くの青年から私共の竜王町にもこんなえらい人があったのか……。と大いに奮起したとの報告を受け殊の他喜んだ次第。聞き伝えは間違えたり忘れたりするもの、今度は近江の人物誌を作る事にしたが流石我が近江は日本の中央に位し京都の都に近い地理的関係と更に歴史上に於ても約二千年前新羅の国皇子金日成が若狭湾に上陸し京都に赴く途次竜王町に足を止め大陸文化を日本に広めた。又天智天皇が大和の国から都を近江に移し志賀の里に朝鮮から多くの文化人を居住させ天皇自らが大陸文化を吸収した。斯くの如き状況から近江の国に有名人物の豊富な事に驚いた次第である。此の度はあまり知られていない人物を掘起し編纂した。

内容一例

忠臣蔵で美伝を残した赤穂浪士四十七人の内大石良雄を初め二十人が近江の人物であり、而も悪名で有名な家老大野九郎兵衛は大石と打合せの上城内の貯蔵金の一部を持出し大石良雄以下

の家族の生活費並打入時の服装等大野がひそかに分配したのである。更に驚いた事は悪名をとった大野以下十六名が大石が打入りに失敗した場合吉良上野介は必ず本家の米沢に逃げ皈ることを予想して江戸から米沢に通ずる板谷峠（山形県の南端）に待伏せ此処で上野介を打取る可く峠の頂上に待機したのであった。処が十二月十四日恙がなく本懐を遂げたことが判明したので大野九郎兵衛以下十六人はこの峠で切腹したのであった。

板谷峠の松林のなかに唯人が建てたか判明しない只『南無阿弥陀仏』とだけ書いた無名の墓が残っている。近江人物として他に類例のない美伝であるこれを書く野生の心も亦嬉しい。

生甲斐

三期生　森野　重太郎

初春を寿ぎ天皇陛下の御平癒を祈念致しましたのに一月七日六時三十三分ご崩御とのニュースに皆して愕然としました。長年に亘る御苦労を偲び只管御冥福をお祈申し上げるのみ合掌。

思えば小生明治四十年に生れ明治・大正・昭和の変還極まりなき時代を歩み今日一月八日平成元年と新天皇の皇位継承による新らしい時代を迎えました。

老大ＯＢの方々新元号の主旨に添い大井にハッスルしてとも

ども余生の生甲斐に励みましょう

すめらぎのみまかりまして諸人の
悼しむ胸に平成元年を迎う

一月八日　　号　久林

平成新年所感

五期生　山西　康雄

平成元年を新しく迎えられた我が身に取って有難い事は、先づ第一健康で新年を迎えられた事である。静養する事を先づ第一義とし新たなる前進を願うものである。

幸い大した変化も見られないまゝの状態で迎えられた此の年の進歩を乞い願い乍らの一念である。

尚又県老人大学校卒業生として今年はＧ・Ｂの技術向上の為に大いに努めたいと色々工夫している。対処するには生活技術の鍛練が必要である上に又色々の障碍する面もあろうが、反面肉身や友人達の援助により苦難を乗り切ることもあろう。Ｇ・Ｂもそのように球を打つ技術、相手チームの妨害、味方の助けによって得る点にも関係する。プレーを楽しみ乍ら過ぎ去った日の反省点としたい。

帰る旅

六期生　野沢政次

作家、高見順氏に「帰る旅」という詩がある。

帰れるから、旅は楽しいのであり　旅の寂しさを楽しめるのもわが家へいつかは戻れるからである。　だから駅前のしょっからいラーメンがうまかったり、　どこにもあるコケシの店をのぞいて、おみやげを探したりする。（中略）

この旅は自然に帰る旅である　もうじき土に戻れるのだ　おみやげを買わなくていいか。

近年、日本人の平均寿命は非常に伸びた。かりに八十歳を平均寿命だとしても、人生の旅はその半分の四十歳ぐらいが目的地で、それまでが往きのコース、四十一歳から後半は人生の帰り道であろう。

帰り道では、往きの元気な旅では分らなかったものに気がつき、深かぶかとした人生を味わうことができる。

旅とは、出発地へ帰ることであり、帰るところがあるから旅は楽しいのである。われわれは今、楽しい旅の帰り道にある。

列車旅行で終着駅に近づくと、「皆さま、長の旅お疲れでございました。間もなく終着駅でございます。お忘れ物のないように」とアナウスされる。これが、ふと「長い人生お疲れでございました」と聞こえる。

人生の終着駅に着く時、自分の荷物は自分が持たなければならない。自分の荷物とは何か。長い人生の旅でしゃべったこと、心で思ったこと、からだでしたことの三つのことは、良いにつけ、悪いにつけ、自分が始末して降りなければならない。

さらに、いつ目的地へ着いてもよいように、子や孫にぜひ遺したい「みやげ」をあれこれと整理しなければならない時期に来ていると思うこのごろである。

（短歌）年の火

四期生　大道喜一郎

杜の闇焦がして燃ゆる年越の火に人垣のこぞりつつ更く

ひととせを事なく過ぎし安らぎに大つもごりの宮の夜を守る

くべ足せる　に炎の揺れのぼるその今をこそ年あらたまる

大前に柏手打てば杜醒めて杉の秀よりぞ明け初めにけり

天つ日を鈴鹿嶺に秘め元日の空ほのぼのと光満ちくる

私の活動近況

八期生　中川　宗多郎

文芸学科第八期を修了して早や一年有余が過ぎ、光陰矢の如しとはこのことかと心に泌みて感じている今日この頃であります。

県下各地よりの人生経験豊かな方々と二年間席を同じくし、各方面の社会勉強をさせていただき、わが人生に二度とないチャンスでありました。

現在地区長を勤めるかたわら単位老人クラブ会長を仰せ付かっていますが、区行政運営は勿論クラブの運営にあたり、老大において学んだ成果をわが人生航路の灯台として活用すべく努力いたしております。

本年度県老連より五個荘町老連が、社会参加モデル推進事業指定地区となり、これをうけて私達の単位クラブが実施クラブに指定されました。私達クラブは次の三項目を重点実施目標として推進中であります。

一、伝承活動

神社祭事における古式しきたりを次の世代に継承されるよう積極的な伝承活動の推進

二、地域交流

子供会を手はじめに、写生大会、魚つかみ大会、ゲートボール試合、会食懇親会等交歓交流会の開催、青年会、婦人会等世代間交流の輪の拡大

三、クリーン作戦

区内の空缶回収、公共広場や施設の清掃作業、プランターを利用した花一ぱい運動の展開により明るい町づくりの推進終りになりましたが、会員各位の御健康で地域の活性化、発展に寄与されることをお祈りいたします。

エンヤコラ会

八期生　竹村　善二

エンヤコラ会は滋賀県老人大学校、㊀芸学科㊅期生ＯＢ会です。

私たち「滋老大」八期園芸学科卒業生、三十二名よりなる会です。八園会とも言っておりましたが、途中で「園八湖等」会と改められ、同期生の親睦と経験交流を深める場として愛されています。

先月十二月十日には、恩師嶋岡孝夫先生をお迎えして、甲賀の塩野温泉で、忘年（同期）会が盛大に行なわれました。

年に一、二回の園八会、お互がいの健康を祝福し、家庭、地域での園芸生活を語り合う、楽しい集いです。当番制（地域）

になっていて、次回は滋賀郡で開かれます。祈る。会員の「健康、安全、長寿、」

生涯学習〃植物にまなぶ〃

八期生　溝　井　常　夫

生きがいを見いだす一つに「生涯学習」がある。それは、生涯の各時期に応じ学習機会を利用し自習的・自発的に学んでいく活動学習の場、老大園芸科に学んで同じ趣味をもつ学友が出来た喜び特に永年公務員や会社の役職につかれた方々の貴重な体験を拝聴でき良き仲間を得た事です。

高令者が自分の生きがいを発見し、また学んだことをきっかけに社会参加の道を開く。生涯学習の必要性がそこにあるのではなかろうか。老大学校長の知事さんが折あるごとに語っておられる「意欲を持って地域のリーダーになってほしい」園芸のノウハウを学んで現在はこの経験を生かし、地元町公民館園芸教室、老ク連寿大学など花づくりの手ほどきを一応講師として趣味を楽しみ乍ら「社会活動に参加でき生がいを感じ」その喜びを隠されない心境です。

老人大学

九期生　伴　清　一

私は、現在も滋賀県立八日市養護学校の警備員として、十五年間勤務さしてもらっております。

すがやかに老いを
学びて淡海に
韻きあいつつ明日をひらかん

の校歌が遠くから聞えてくるような感をいだきつつ卒業さして頂いて早約五ケ月が過ぎようとしております。

学窓からながめた大津市内が目にうかび、いろいろなことが走馬灯の如く流れ去り、感無量です。時おり、卒業式、体育祭の様子をビデオ録画で観賞しつつ友の顔を思い出して、その健康を祈念すると共に互に見知ぬ者が二ケ年語りあったことは消え去らないことと思います。

特に園芸学科では辻先生の基礎的より教わりそのご熱心なご指導は、温き思いやりの心を人として大切であることを力説され、いかなる生物も育ててゆく愛の心こそ肝要でなければならないと申されたことが感銘深きものです。又必修学科として諸先生の講話に新しき知識を得、今その意義の深さを感じます。又民謡には花笠音頭、宮津節、淡海節等に大声を出したこともよき思いでです。交流会では老人ホームの方々と接し高令化社

会に向っている現況互に友愛を深くしなければならないと、感深くしました。

卒業旅行には、開通五日後の瀬戸大橋を渡り、日本技術のすばらしさをしっかりと目におさめました。卒業式当日には学友と共に山代温泉で盃をかわして長寿と健康であることを祈念しあい、ほたるの光のハーモニカ演奏で互に別れあったものです。

老人大学、それはいかめしく感じられますが今二年間をふりかえって思いますことは、高令化社会に前進しつつあるとき、一人でも友を得て、助けあい、はげましあい、人間老人大学の重要性を感じます。

老いてゆけば、記憶も弱く、身体も弱くなるのは必然的でありますが、老友互に語らい、思いやりの心が生れでるのも老人大学の学習ではないでしょうか。祈念します皆さんの健康で長寿を保たれますことを拝しつゝ筆を止めます。

滋賀老大同窓研修会に参加して

二期生　山　本　喜一郎

研修会開催の通知を受け会員相互の親睦と会の活動の活性化を図り意見交換の場として研修旅行を計画され参加させて頂きました。

第一日は八幡駅に集合バスにて長命寺港へ更に船にて沖島へ沖島の西福寺にて住職茶谷教侑師より島の伝説等の講議を受け更に寺宝等を拝観後記念写真等昼食後は自由研修にて願証寺氏神魚港学校等見学民宿小川屋久田屋の二ケ所に分宿し意見の交換親睦会が開かれ伝説の有る島にて一夜を過ごす。翌日は波静かな湖上を船二隻に分乗し沖島を出港沖の白石、多景島、竹生島にて昼食参拝後大津港長命寺港八幡にて解散終了の予定です。この計画は時間に余裕が有り私共には有難い計画で更に幹事近江八幡市の中島庄右衛門氏には大変ご苦労が有ったと思います。

此の度の研修には正面裏面の見方が有りましたのは一番の収獲です。何時も陸上から湖面を見て居るのが一般で湖上より見る島又は陸を見たからです四島一石それぞれ違った素顔が有り、南の方には人造島が草津に有り琵琶湖の中程の沖島は近江八幡市に属し、戸数百四十余戸の湖中一番の大島で古元は水位の関係で南北二島に分かれていた様で、電気電話水道も有り湖周とさほど変らぬ生活が出来る。次は安曇川町に属する通称沖の白石岩は数十米の湖底より出た石柱で元は土も有ったのが永年の風波に今は心岩のみ鳥の休む所です。

東四粁程の所に彦根市八坂町の出地で同町在住の一家四人が堂守り、今本堂修繕中で多景島の名は湖上各方面より美影が変り見えるからこの名が付けられた様であります。白石より北十四

粁の所に博物館の有る竹生島、千何百年前に役の行者小角の枝竹が生えた二股竹の霊験が竹生島の名の由来です。寺・宮・弁才天・宝物館等見る物多く二時間では充実でないと思います。当島はびわ町の出島で冬は住民も数人のみです。帰心も高く我々別行動にて帰彦しました。

（湖上老友と船上にて）

古稀喜寿の友らつどいて船の旅
今日の小春日うるはしの顔顔

冠句の面白さ

三期生　西　山　弥一郎

今年の春、はじめた老人会の冠句の句集も十号を数える様になった。冠句とは？の人達も勉強を重ねて漸く味のある句を作られる様になり、毎月句集を作るのが楽しみになって来ました。

秋の夜長を句作に励んだ句を紹介しましょう。

とぼとぼと　敗けた力士の足重し
金ゆえに　竹馬の友も敵味方

私の処女作、稚拙ながら、それなりに表現されています。それから巻を重ねるに従って、句友も増えて来ました。

泣いている　世話する夫の手を握り　圓月

最近、妻を亡くした彼の心境が心をうつ句で印象に残る句です。

泣いている　優勝カップ握りしめ

或る日のスポーツ少年の一コマです。

ひとり身の　寝間の広さやすきま風
チョッピリ色けをたゞよわす私の句。
おこられて　ふくれてそっと涙ふき
理解ある　顔が女房のさばらせ
ろかされて　命養う　岩清水
まかされて　重さにあえぐ新総理

広い視野から拾って見た私の句です。

遠くなり　機の姿なき飛行雲　夕虹
遠くなり　父母のおわさぬ里帰り　美代

最近、特に味のある句が多くなりました。

句の功拙を問はず、まずければまずい乍ら、うまければそれなりに作句は楽しいものです。

毎月の句集作業が私の生き甲斐の様に楽しませてくれます。

親睦会

三期生　辻　幸夫

毎年一回の親睦会、専一七会、昭和十七年東京気象庁予報部予報課勤務の三十五名中の十四名が東北の平泉に集まった。今回は四組の夫婦が参加した。毎年集まるので本人はあまり変りがないが奥さんは始めての人もあり各自それぞれの趣味を話し合った。皆んな立派な腕前に私もますます気力がわいてきた。

みちのく平泉伊達政宗歴史館、中尊寺、整備された広々としたゆったり美くしい瑞鳳殿、金色堂、弁慶の立往生の場、よく保存されたものである。観光行政がほんとうに完備されていることに今さら乍ら感心させられた楽しい旅であった。久し振りの仙台市、青葉の多い街、街路樹も大きくなり広い路広島市によく似ている。松島には十六時、幸い静かで夕日が美くしい。岩は侵蝕がひどく自然の力が感じさせられ一部は変形しておりもったいない思がした。

東京駅の相変らずのあわたゞしさと電車の発着が相変らずだが以前と変わりホームは最大限の使用で専用ホームも時刻表を確認しながらの旅であった。千葉の九十九里浜も変化した人の手が加はり大変な変り方であった。こゝにも自然が大きく変り淋しい鯛の浦日連上人誕生の地誕生寺にお参り人間の修業の大変さを思はせ、せめてもの思いで繻子をもとめた。

今一つは昭陽会小学校昭和五年三月七日尋常高等第六年二学生卒業の人十八人の集り相変らずの元気な姿で先づ安心我を忘れて話し合い皆んな変っている思い出せない人もいて面白い。彦根の老人クラブの福寿大学の学習で明るく生きたいと題して近江ふるさと園理事長大久保昭教氏のお話の中で、老人ボケはボケ一りつではなくその人の幼時の頃の環境により十人十色で個性は死ぬまで自分のものであるとのお話があった。自分なりに考えさせられることである。

他人に教えられ今日自分が育たれたものであり人とのお付合を大切にしたい。自分も人に教えられる人になりたい同窓会に出席して。

座右の銘

三期生　北川　弥一郎

「農に生きる農の心を会得して自然の恩恵に浴する」座右の銘として人生八十五歳の坂を越えて昨今与えられた仕事は、約八畝歩の畑で花卉・蔬菜・果樹など思いの種類を選んでは、毎日の仕事に追いつ追われつ幸い健康の日々です。又三期生文芸学科の湖友会短歌会に出席するのも楽しみです。

最近の詠草から

十二月詠草、秦荘町史談会員で安土町城郭資料展示館と野洲町銅鐸博物館を見学して

㈠ 信長が誇りし天守の金瓦　展示されいる安土城館

㈡ 野洲町が自慢の銅鐸数多く　集めて建てし博物館成る

十一月詠草、老大同窓会で沖の島探訪して

㈠ 沖島の秋を湖岸に佇めば　かすみてはるか高島の邑

㈡ 民宿の窓より望む湖遥か　比良の山なみ落日が燃ゆる

十月詠草、滋賀県地方史研究家連絡会で北近畿地方史跡探訪して

㈠ 京都府北文化財探ね巡り来て　史家連なかま由良荘に入る

㈡ 天照大神まつる皇大神　老杉深き　大江山麓

（元伊勢皇大宮（京都府大江町））

病後の生活について

二期生　近　藤　辰次郎

私は昨年五月十五日自宅浴場にてたおれ救急車にて彦根市立病院にて診察の結果、脳梗塞にて全治迄は三ケ年を要すると云われ、面会謝絶にて、死を覚悟しておりましたが、神仏の御加護と、皆様方の御力添と家族の協力によりまして奇跡的に助かりまして院長も貴男みたいな患者はいまだかってありませんと云っておられました。百余日にて退院致し何等後遺症もなく毎日元気で神仏のお礼詣りを運動を兼ねて行っておりますが残り少ない人生を少しでも善根を施し好かれる老人として天命を全う致したいと思っております。不備

追　憶

七期生　寺　村　ヨ　シ

県の老人大学を卒業して早くも二年が過ぎました。私の卒業を我慢し待っていた様に主人は寝込んで終いました。主人は私の老大入学を快く賛成しその協力によって無事卒業することが出来ました。通学で家を留守にし何かと不自由をかける事についても決して不平不満を云った事はありませんでした。それだけに私は誠心誠意看護に専念いたしました。最後の死因は脳梗塞でした。

一年をすぎ今日一周忌の法要をすませましたが、今一人になって私の心を専有しているのは主人の事ばかりです。二人で生活している時は空気の様な存在であった主人が、亡くなってその重みが私の胸にひしひしと迫ってくるのです。

これからは主人の生き方を目標にして大切に生きてゆこうと思って居ります。

主人は四十才半ばで肺結核の再発で肋骨六本と中肺1/3を切除する大手術を致しました。（身体障害四度）二年間の療養休職の後高等学校に復職して、そこで停年まで務めました。退職後は引続きその年創立の岐阜短期大学（現在滋賀文教短期大学）で専ら国文学を指導していました。そして十八年間務め、最後の年昭和五十九年三月の卒業式には自からの作詞による滋賀文教短期大学の校歌を披露発表して頂きました。そして自からは国語教育に終止符をうち自己への餞としました。

無理することの出来ない体で三十有余年を教育にたづさわってきた主人の生き方強靱な精神力に私は畏敬の念をもって振り返っています。

退職後は裏庭にある僅かな畑に己の世界を見出し晴耕雨読を楽しむ毎日でした。

二人の子供はそれぞれに世帯をもって安定した生活を営んで居ります。

私は主人の残してくれた生活設計のもとで健康に気をつけ残された人生を、心豊かに生きてゆこうと思って居ります。

私の近況

一期生　高木三雄

老大も古くなりしかな。一昔十年、今年はその十一期生の募集となる。

数年前より特に足の不自由となった私には同期（一期）生の消息は勿論、後輩の皆さんの様子も知り得ませんが、湖北支部長宮崎氏の来訪を得て同窓生の模様を伺い、故人となられた方の意外に多いのに驚き、ご冥福をお祈りすると共に、我が身の今日ある幸せを感謝しています。

一病息災と云う、十年を越す慢性持病のリウマチ以外は、病気ご免と頑張っていますが、おそいくる年波に打ち克つことも大変です。読書と物書きしか能のない者が、その意欲も半減してぼんやり（老人ボケかな？）することが多い。

老大園芸科で習ったことを、気づくまゝに孫に話していたことが以心伝心か、よく心得て庭木の剪定、鉢もの手入れなど、なかなかのもので、目を楽しませてくれます。

六十年六月、吉野金峯山寺に五条順教師を訪ね、法を問い、道を教えられ、前後して写経に励み、昨年写仏写経を一枚に仕上げ、表装して床に掲げて来客のご批判を頂いています。

満七十四歳のわが生を確め、何時でも冥途の旅立ちが出来る心づもりです。

心構えは弱そうですが、本人負けぬ気で、廿一世紀の空気を吸わねばと、意気ごんでおります。

地蔵盆晴れ上がる雨日そゝぐ
見にくい目しっかりダリヤ大きくなる
瞑すれば山寺に坐す蝉時雨

湖友会のこと

三期生　加藤さだ

私達老大三期文芸科卒業の有志達が伊藤雪雄先生に御願いして短歌の御指導をうける様になって満七年がすぎました。

老大の文芸科に入学が許されました時古典文学でも勉強させて頂けるのかと漠然と思って居りましたら短歌と書道。見渡したところ誰も作歌の経験のない者ばかりでしたが二年間短歌の歴史実作等と通しそれぞれが短歌に興味と親しみをおぼえ生涯の友としたいとの願いから御多忙の先生にお願いして月一回御指導を受けられる様になり湖友会と名づけました。温厚な先生は老人の楽しみにとお思いになられてか一向に上達せず助動詞助詞の用い方さえあいまいな又定形と程遠い様な歌の場合がありましても作歌者の気持を充分お聞き下さって根気よく御指導下さりふり返りまして七年間に少しは上達したかと悩む事も暫々あります。しかも五年余を毎月詠草を持ちより先生の添削を受け一首が生きた短歌に蘇がへった時には何にもかえがたい嬉びです。

春秋には折をみて先生にも御同道頂き楽しい吟行会を催すこともあります。

昨秋は紅葉の美くしい東福寺へ吟行いたしまして楽しい一日でした。気は若く前向にと云っても病気療養中の方、又不幸にも不帰の旅に出られた方もあり会員の少なくなるのは淋しい事ですが現在十人程の会員は月一回の例会を楽しみに頑張って居ります。

終りに東福寺吟行と会員の近作の短歌を披露させて頂き筆をおきます。

伊藤　博祐

通天橋もみじの橋を渡りおへふりかえり見てシャッターを押す
松の内の風吹きすさぶなか客去りて遠寺の鐘ひびきくるなり

北川弥一郎

吟行に東福寺の紅葉を通天橋に満喫しおり
長年を花の町づくりに尽したる表彰状に生きがいのわく

桑野　大

びわの湖を抱きしむる手のあたたかし二十余万人一つの輪となる

湖を抱く人等つらなり鳰の浜に五色の風船舞い昇りゆく
大橋昇治郎

紅葉見の宿に箸とる温かさ煮つまる鍋に笑顔よせつゝ
目にとまる善の積れば福生るのわが家の額に恥ずる明けくれ
中島庄右衛門

東福寺三門楼上の仏像は国宝にして深きいろもつ
節寿なる誕生日迎ふ健やかに孫の祝云うくる倖
増田　三郎

つぶやきかしわぶきか夜の空の闇をわたりて遠きいかづち
古き葉の衣ことごとし脱ぎ捨てし庭に蝋梅の花咲きそろう
伊達　初子

夕闇は山くろずみひそけくて菊乱れ咲くゆく秋の庭
山の木木秋のよそおいきえさりて佗し冬木よお眠りなさい
西尾　公子

釋迦像をめぐりて在す十六羅漢むくつけき面におかしみも
見ゆ
青空に一きわ映えて蝋梅は如月の微風に清しく香る
中村千代子

刻刻と沈む太陽を陸橋にしばし見ており列車おり来て
手をふるればすずしき音色きこゆるやあしびの森の白き花群
加藤　さだ

通天橋の紅葉めでつつ谷におり三葉楓と言うを拾いぬ
冬天の乾きたる田に鵜一羽畦をあちこち啄みあゆむ

草津謡曲研究会について

三期生　西　尾　公　子

老後の生活をより健康に、より楽しく生きるためには趣味を持つ事が大切である事は言を俟たないが、謡曲を勉強する事によって少しでも老化を防ぎ健康に老いる事を目的として生れたのが草津謡曲研究会、略して草謡研のグループである。幸い老大在学中の同級生の中に謡曲歴七十年と言う大ベテランの伊藤博祐先生が居られてお願いした処、我々ズブの素人にも快く教えて頂ける事になって、会が発足したのは五十八年頃だったと思う。

現在会員は七名で、内訳は三期文芸科の人四名、同生活科学科の人二名、四期文芸科の人一名が月の中二回を草津市立勤労福祉センターに集って楽しくお稽古を続けて居る。会員の中の森野茂吉さんは特別会員とも言うべき人で、随分昔からお稽古を積んで来られたらしく時には伊藤先生の代稽古をお願いして居る。又田中きりさんも二十年以上もお稽古して居られてお上手な方である。後の五名は全くの素人で何日迄たっても少しも上達せず伊藤先生には誠に申わけなく思って居る。

年に何回かは発表会が催されて、伊藤先生が指導して居られる他のグループと合同の時もあり、又草謡研の人だけの時もあるが最近の発表会は十二月二十一日に会の人だけで忘年会もかねて催された。当日の演目は、一「竹生嶋」（シテ大橋さん前ツレ中嶋さん後ツレ田中きりさんワキ西尾）二「羽衣」（シテ田中きりさんワキ田中花さん）三「小袖曽我」（シテ西尾ツレ藤野さんツレ田中花さん）四「天鼓」（シテ加藤さんワキ森野さん）五「猩々」（シテ森野さんワキ藤野さん）でそれぞれ勤められた。平素の練習は伊藤先生には申訳けないが兎角さぼり勝ちであるが、発表会ともなれば皆様充分に練習して来られたと見えて、仲々の出来栄えであった。会が終ってからは親睦会を兼ねた忘年会が催されて隠し芸等も披露されて楽しい一時を過した。

他の会員はどう思って居られるか判らないが私の場合は、これ迄全く未知であった謡曲を習う様になった事は本当によかったと思って居る。恐らく他の方達も同感ではないかと思うが、謡曲を覚える事によって少しは頭の体操をする事が出来るし、下腹に力を入れて発声する事は健康増進にもなると思う。又世阿弥によって作られた美しい文章を読む事も楽しく教えられる事も多い。月に何回か草謡研に通う事によって新しい友人も出来て、お稽古の合間におしゃべりを楽しむ事も出来る。

我々は好むと好まざるに関らず年毎に老いて行く事は否む事の出来ない現実なのであるから、それを思って一日でも長く健やかに生きるために趣味を楽しみ、生き甲斐のある日々を送りたいと願望して居る。更にこの機会に一言を加えるならば、一人でも多くの友人がこのグループに参加して来られて、益々この会を楽しいものにしたいと願って居るのである。

湖友同窓会

三期生　坂田　定五郎

新元号平成元年を迎えここに書く同窓会も昭和の最後であった。

六十三年秋彼岸の前日（十九日）近江八幡休暇村で開いた会である。汗ばむ程の良い天気だった。稲田は黄金色に広がり蔓珠沙華が真赤に咲いていた。

ＪＲ八幡駅に出席の方をお迎えした時は格別の懐かしさで感激した。定刻全員集合。迎えのバスに乗れば十五分程で、緑の山、清い水のびわ湖に沖島の見える休暇村に着く。バスを降りると清涼な空気がおいしく別世界だった。十一時開会、先は他所行の顔にて記念写真、続いて亡くなられた級友の霊に対し黙禱を捧げる。

愈々お待兼ね宴会である。

何と九十才になられた伊藤さんの御元気な発声で乾杯!! パチパチパチと拍手。

会食料理は近江ならではの湖や山の幸、近江牛肉、鮎の姿焼等結構な献立てで一杯呑もうとしていると、中島さんが鮎の鰭酒を教えて下さった。前鰭二枚を取り盃に入れ燗酒を注ぐ、得も言われぬ甘味のある酒になっていた。うまいうまいと賞めて盃を重ねるとホロリと酔ってきた。何かと話に花が咲く。頃合を見たか、古川さんが「歌をうたおう」と唱歌の時間となった。桑野さんが其の瞬間持参の歌曲集を全員に配られた。其の配慮には敬服。月の砂漠に始ってなつかしい歌ばかり、音痴の私も鬼に金棒とばかりそれを頼りに歌う。マイクロホンの休む間もなし次々皆さんが歌う。女子の西尾伊達中村さんの美しい声が流れる頃は最高潮、ダンスを踊る人もある。男子もこれに応じて張り切る。

最後は全員立ち上って大合唱、たのしい、たのしい、こんな同級会が又出来ます様にと願いつゝ三時再会を約して閉会となった。

小、中学校の同級会ともなれば年頃も同じであるが、大学生ともなれば年の差もある。我文芸科も明治、大正青年で占られ九十才から最年少は七十才迄二十才の開きがある。そんな年令を感じさせない話し合いなぞうれしい。自分の過去、処世術、左右の銘なぞ各自で話されると名講演に価するものがあって良い勉強になった。

全員で童謡を合唱した時は、遠い少年少女の童心にかえって共に懐かしむ一幕でもあった。一味も二味も違うそんな老大湖友の同窓会は私は大好きである。

昭和六十三年度
第二回研修会を終えて

研修部長　中嶋　庄右衛門

去る十月十、十一日と一泊二日研修旅行を左記に於て実施致しました処全く両日共二十四号台風の過ぎし直後で予定変更のお蔭で快晴に恵まれました事を先づ第一に何より喜ばしく存じております。

早朝より中川会長様始め本部役員、会員各位の格別の御協力を得まして何の事故もなく無事終了致しました事を心より喜び各位に厚く感謝致しますと共に不行届の点多々あった事と存じ深くお詫び申し上げる次第であります。

此処に研修の概要を御報告申し上げる次第であります。

十日十時ＪＲ近江八幡駅前に集合貸切の近江バスにて長命寺港へ直行二隻の貸切船にて沖島へ渡りまして浄土真宗本願寺派西福寺へ案内参加者五十八名は早速御住職で元沖島小学校校長

の茶谷先生の御講演「琵琶湖と沖島に付いて」と題して約一時間二十分拝聴、今回の研修目的は之であると受講者の殆どが要点をメモする熱心さ、お寺の本堂は淑として先生の声以外は何一つ雑音もなく昼食も十二時四十分になるも先生の熱弁と我々受講者の心と心がピッタリ一致空腹も忘れて熱心そのものゝ風景でありました。

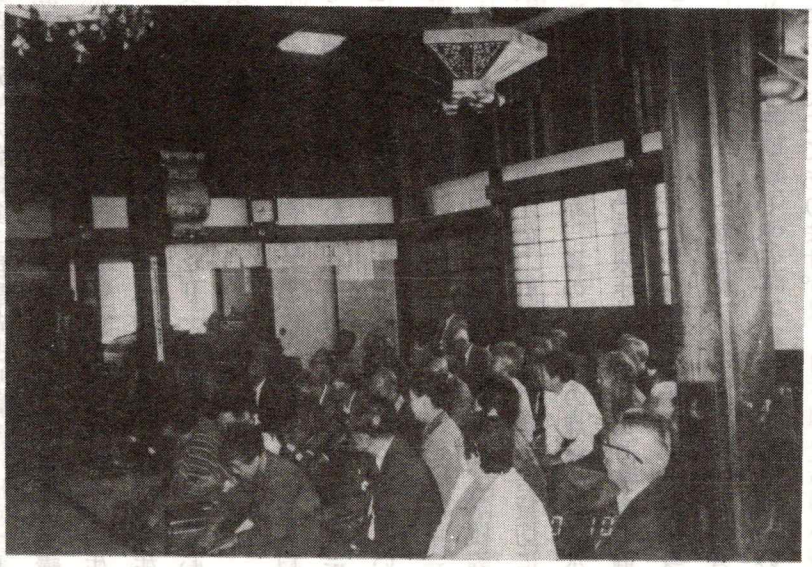
其の内容も琵琶湖の今昔、沖島の今昔、と人口、行政、風俗等詳細に亘り内容も全く充実しありて其の中に宗教的な家庭、地域も活され巧みな話術で老大ＯＢにふさわしい内容であった事と確信致しております。

二時三十分より自由行動で漁港、神社、学校等を見学約二時間にして民宿島内全宿二軒湖上荘、島の宿貸切にて分宿対岸の大津、雄琴方面の赤、青のネオンの点滅の灯が水に写る其の夜景が窓越しに一流の温泉ホテルの感ありて夜の静かな海辺に老友は語る中にカラオケを楽しみ隠し芸に老いの身の男女の社交ダンス久し振りの一夜床に入ったのは十時を過ぎておりましたがさすがは老大のＯＢ何一つ迷惑事もなく楽しみの内に深い眠りに付いたのであります。

第二日十一日も晴天波一つない水面老友は朝の挨拶お早ようさん今日も大丈夫予定のコース沖の白石、多景島をゆっくり見学竹生島へ行けると楽しい合言葉朝食もそこそこに済ませて漁港前に集合八時三十分出発約三十分にして沖の白石に到着大小数個の岩、石の上に沢山の小鳥が鈴蘭燈の如くに休息しおりて船長に聞けばあれは鵜との由であったが船が岩、石に接近すると全部遠くへ飛立って湖上に降りて雄々と遊び廻る光景は全く海ならで否沖の白石でなければの景情で一刻千金にも値するのであった。

白石も船上より暫しにして出発約二十分にて多景島到着我々の年輩者にはなつかしい誓の御柱が天高く聳え立っているのが船上より見られ早速上陸坂は凹凸甚だしくお互足元に気を取られまして短い距離でありますが足は可成り疲れまして漸くにしてお寺に到着一人奥様がおられまして一人幼稚園児位の男の子が居まして其の内にカセットの説明が始り約十分位で終りますと其の児が僕教えてあげると言って足元の悪い岩石の坂道断崖絶壁一つ間違えば三十余米下の湖へすべり落ちる危険な個所を幾個所も身軽に先頭になって伝説深き大きい岩石の処へ案内してくれまして立札の説明を見ると伊井大老が桜田門外で悪漢に切害さられた時に此の石に血がにじみ出た由でこれを弔う当高僧が三年の月日を費して南妙法蓮華経の刻まれた大きい岩石を湖上より今一度拝して別れを告げ竹生島へと約三十分にて到着入島料金を支払って社、寺へ各自参拝民宿よりのおにぎり弁当に舌つゞみを打って昼食それぞれに我が家への土産物を若干買込んで波一つない静かな湖面快晴に恵まれて遥か彼方に彦根、長浜を遠望本研修旅行の目的は予定コースを無事紙了大津、高

島方面と他方面に別れ二隻に分乗滑るが如く静かな湖を走り一路長命寺大津港へと全速スピードで約一時間で長命寺港へと約三十分予定より遅れましたが長命寺港にて大津方面の船に手を振り振り蛍の光で別れを惜しみつゝ解散致しました。



老人大学校の現況と使命

明るい長寿社会を拓く湖の理想郷づくりを目ざすレイカディア構想。その一端を担うといっても過言ではない当大学も、開校十周年を迎えることになり、その記念と年々志望者も多くなることから去る十月待望の米原校が開設された。

米原校は定員八十名であったが、応募者数の関係で、定員を超す入学者になり老大の意義が徐々に浸透した感がした。学科も時代の流れに即してスポーツレクリェーション学科が新設され、順調なスタートで二カ月が経過したことに対し紙面をかりて感謝の意を表します。

ところで、このように老大が充実発展する中で、卒業生の動向はどうなっているだろうかと考え、昨年老大同窓会の組織を通して調査した結果、各市町村で老人クラブや社会福祉協議会、民生委員等の地域社会で役職員として活躍されている方が二三%であった。

老大の学習基本計画の目標に、高齢者の自主的な集団活動を推進するための技能を習得し、地域指導者としての資質を身につける。この目標から考えると、今少しの伸びを期待したいところである。

今後、卒業生は知識、技能の習得を社会参加活動へ還元するよう努力願いたいものである。このことが、老大の意義を高め

ると同時に県民の負託に答えることになると思われる。

（老大事務局　片岡　徳夫）

滋賀県老人大学校
開校十周年記念を終えて

平成元年三月十一日午前十時三十分から大津市民会館で、学校長の稲葉知事の出席により盛大に挙行されました。

来賓として国会議員各位、県議会議長、並びに関係者各位のご臨席を賜わり、老人大学校の建学の精神が一段と高揚されたものと確信すると共に、同窓会各位の、この記念事業を推進するため、絶大なるご尽力を頂き盛大裡に終了いたしましたことは、これひとえに、同窓会組織を挙げてのご協力の賜と事務局一同感謝いたしておる次第でございます。

これを契期に、現在在校している十、十一期生は勿論、今後入学される方をも含めて、よき歴史と伝統をつくるよう努力しなければならないことを痛感するものです。

（老大事務局）

ごあいさつ

滋賀県老人大学校は、高齢者に学習の機会を提供し、社会活動への参加や生きがいを高めるとともに、地域社会のリーダーを養成するという目的で、昭和53年度に滋賀県が設置した大学校です。

以来、9期752名の卒業生を送り出し、それぞれ地域社会でご活躍いただいているところであります。ここに10周年を迎えることができましたことは、関係各位の温かいご協力の賜であり、喜びにたえません。

今後とも、大学校の建学の精神であります、「地域社会のリーダーたれ」を念頭に、卒業生、在校生ともども、思いを新たに、新しい時代の高齢者像の創造に邁進されますよう念願いたします。

平成元年3月11日

滋賀県老人大学校校長
滋賀県知事　稲　葉　　稔

午前の部　記念式典

9:30	受付開始
10:30	開　式
10:33	校歌斉唱
10:38	物故者黙禱
10:40	学校長式辞
10:45	感謝状の授与
11:00	来賓祝辞
11:30	卒業生の思い出披露
11:45	決　意　在校生代表
11:55	閉会の辞

午後の部　記念公開講座

12:30	受付開始
13:30	開　講
	◆講　師　曽野綾子さん
	◆テーマ　『自分自身のための人生』
15:00	閉　講

●講師プロフィール●

本名　三浦知壽子

現代文学を代表する作家。1953年、三浦朱門氏と結婚、翌1954年、聖心女子大学英文科を卒業。主な公職としては、米日財団理事、科学技術会議専門委員、筑波大学参与会参与、静岡大学大学院参与会参与など。主な著書には、「無名碑」（1969年）「神の汚れた手」（1980年）「時の止まった赤ん坊」（1984年）「この悲しみの世に」（1986年）などがある。

感謝状受賞者

園芸学科講師	辻　與左衛門
〃	嶋岡孝夫
陶芸学科講師	大西忠左
〃	西尾千秋
〃	北村壽三
〃	伊藤公一
〃	川口雄司
〃	高井隆三
生活科学科	岡崎文子
〃	川村正純
生活科学科	栃本博子
〃	大辻房枝
〃	松本冨喜子
文芸学科	伊藤雪雄
〃	三原研田
〃	谷本　勇
事務局職員	広瀬亮誠
〃	坂　啓二
〃	国松佐三郎
〃	宮崎洋子

滋賀県老人大学校同窓会会則

第一条（名称）

本会は、滋賀県老人大学校同窓会と称する。

第二条（会員）

本会は、滋賀県老人大学校卒業生をもって組織する。

第三条（事務所）

本会の事務所は、滋賀県老人大学校本部内におく。

第四条（目的）

本会は、会員の親睦および老大の発展に寄与することを目的とする。

第五条（支部）

本会に支部を設け、前条の目的達成をはかる。

第六条（事業）

本会は、前条の目的を達成するために、左の事業を行なう。

1. 総会　2. 研修会　3. 老大後援活動
4. 会報と新聞の発行　5. その他の事業

第七条（事業部）

本会に事業部をおき、支部長、理事をもって構成し各部員は会長が委嘱し、部長は部員の互選による。

1. 研修部　2. 総務部　3. 広報部

第八条（役員および役員の選出、任期）

本会に次の役員を置く。

1. 会長一名　2. 副会長一名　3. 理事、各支部二名（支部長および支部選出者一名）　4. 幹事二名（会員、事務局から一名）　5. 監事二名。

役員の選出方法

会長及び副会長は、役員会によって選出する。

理事は、各支部から選出する。

監事は、各支部が交替で二名選出する。

役員の任務

会　長　本会を代表する。

副会長　会長を補佐し、会長事故あるときはこれを代行する。

理　事　本会の運営に当たる。

幹　事　本会の事務を処理する。

監　事　会務、会計を監査する。

役員の任期

役員の任期は二年とする。但し再任は妨げない。

第九条（会議）

総会は、会長が招集し、議長は会員の中から選出する。

総会の議事は、出席者の半数以上の同意をもって決する。

第十条（顧問）

本会に顧問を置くことができる。

第十一条（経費および会計年度）

本会の経費は、会費を持ってこれに当てる。

会費は、A会費とB会費とし

A会費は、年　額　一、〇〇〇円

B会費は、終身額　一〇、〇〇〇円

とする。

会計年度

本会の会計年度は、毎年度四月一日から始まって、翌年の三月三十一日をもって終わる。

付則

本会則は、昭和五十五年十月一日から施行する。

（改正）昭和五十七年十月一日から施行する。

（改正）昭和六十年四月一日から施行する。

（改正）昭和六十一年四月一日から施行する。

（改正）昭和六十二年五月二十三日から施行する。

（改正）昭和六十三年六月二十二日から施行する。

昭和六十三年度同窓会役員名簿

会　長　中川　長三

副会長　中村　標雄

理　事

高島支部　○岸　田　七　次（総務）

森　三　郎（研修）

大津　○中　村　標　雄（広報）

桑　野　大（研修）

湖南　○林　秀　一（広報）

後　藤　猪三郎（総務）

甲賀　○丸　市　喜　好（研修）

宿　谷　光　次（広報）

湖東　○塚　本　源太郎（広報）

畑　中　保治郎（総務）

近江八幡　○中嶋　庄右衛門（研修）

中　嶋　實（総務）

彦・愛犬　○野　中　正（研修）

辻　幸　夫（広報）

湖北　○宮　崎　程　彦（総務）

北　村　勘　七（研修）

監　事　島田寅次郎

林　長夫

幹　事　中村　標雄　〈副会長〉

片岡　徳夫　〈事務局〉

○　印　支部長

（　）　所属部

編集後記

○　新しい年となった一月七日、三ケ月にも及ぶ長い療養の裕仁天皇は崩御され、年号は「平成」と改まり、明仁天皇は未だ諒闇の身にあられる。

故裕仁天皇は長寿の上からも、在位の上からも最も長命であり、しかも激動の中の一生であった。

明仁天皇の時代こそ世界永遠の平和と繁栄の時代であって欲しい。

○　滋賀県老人大学校は昭和五十三年に創設され、来たる平成元年三月十一日には、創立十周年記念式典が挙行される運びとなっておりこの滋賀県老人大学校同窓会会報も創立十周年記念誌として名が飾られる事となった。

○　時代は既に、高齢化社会に入り無職となった老人達は、明ければゲート・ボール、或は誘はれゝば旅行にと外見は如何にも穏やかに見えるが内面の経済生活では次第に苦しく金を使はないケチケチ生活に切り替えて来ている。こんな時の昨年の秋、大物政治家達がリクルート株譲渡で大儲けをしたことがバレ其れが為急に政治不信が広がりつゝあると言う。

しかしながら、わが滋賀県老人大学校同窓会会員は己の正しい道を違えずに歩み、子孫に財は残せなくとも正しい生き方の手本を残したいと念願しているものである。

○　会報第六号は昨年十一月三十日に発行することを役員会で決定し正月一杯かけて原稿集めをする事になっていました。大凡の支部ではこれをよく守りお陰を持ちまして此処に発行となりました。

厚く御礼を申し上げます。

○　会報について欲を言えば寄せられる原稿が単なる作文ではなく同窓会会員の真摯な生活の記録で在って欲しいと願うのでありますが強欲でしょうか。地域社会にあって、身を呈して社会に奉仕し自分自身そんな生き方が生甲斐となり世間から慕われて生きたいとは思われませんか。こんな生活体験の記録を第八号には沢山お寄せ下さる事を熱願して編集後記の筆をとじます。

（広報部長　林　秀一）